

曾我會稽山

作者 近松門左衛門

照射一獸を呼び寄せる爲の罫火
狗は獸を云々
皇皇曰 逐殺ス
獸者狗也 登殿指示者人也 諸君功狗也 至如 何一功人也の句を取れり
狩衣一假るにか
一天一矢は點なり、今の三十分御臺所一平政子

照射する火串の影のねらひ獵、狗は獸を追ふて殺し、人は其處を指示す。今諸軍は功犬なり、蕭何がごとき、勝處を指示すは功人なりとの故事の心を爰に狩衣、裾野にしばし御宿陣。右大將家の御威勢は、富士より高き鎌倉山。建久四年五月廿八日と、明るも寅の一天に、虎の御門ぞ開ける。御留守なれ共式日の御禮は御臺所に與奪有。竹取の間に給へば、和田山千葉上總大老執權の北の方を始として、工藤梶原宇都宮、土肥佐々木三浦黨、昵近高家の内室達、其外御譜代由緒有家の子の妻女迄、夫々の格に任せ、座次を亂さず參列して、廿八日の御禮一度にあつと拜謁有。袖の縫もの綾錦高燈臺に輝きて、金泥砂子竹とりの、翁が娘のさいしきも光を恥る計なり。斜ならざる御氣色にて、政なふ旁、富士の御狩の御留守に、幼稚の頼家、いひ甲斐なき自ら、各とても女の

與奪一將軍の名代
竹とりの云々―
彼の赫灼の繪を
金泥の彩色にて
寫したれば光を
増すと也
筆も云々―筆は
鹿の夏毛にて作
るをよしとす
故に筆頭の意に
かけたり
鉄細き云々―矢
傷も小さければ
頼朝の腰袴に供
せんと也
請射―肘をさす
と日影さすの歌
詞とかく
月の輪―鹿の身
にある模様、月
の縁に兎を出し
兎は登坂を巧め
とす夫を打とめ
しと也、月呼海
上―兎走波(倉
々言)

山猪―猪の事

身、鎌倉を靜謐に持固めしも大將殿、武威目出度き故ぞかし。あの庭上に列べし御狩の
中の勝物送られし、射手の響も顯すため、それく「目錄」と宣へば、中原吉之が妻承
り、男文字に和訓を付く、てには巧みに讀んだりけり。日録、御帳面の第一の筆も夏毛の槩
は、大友の市法帥まだ十五歳の小腕の矢さき、就中御褒美たり。番鹿は秩父の六郎、三
町五反の尾上を隔て、鉄細かき鹿子まだら、御行藤の料たるべし。牛共象共紛ひて三刀
かき切たる肋骨、仁田の四郎忠常が、世上の美談に乗たる猪、御狩一の高名なり。長沼
五郎が諸肘、さすや岡邊に蓬喰、叻々と鳴小牡鹿の角、二つに引裂て是を手取の證據と
す。捷は土肥の彌太郎、岩ほに窺、狼、その胡を踏んで擲きとめたる一討の、力鉄鞭恐
ろしき、虎狼より盛長が組で刺留しあら熊と、名は明らけき月の輪も、浮んで薄の波
走、番ひ兎の登り坂、駒馳ちがへ長刀に、のせてとめしは小山の判官。皮に疵なく山猪
の、眉間の骨を射摧しは淺利の與市が神頭の弓勢。足鷹山に足くらべ、追もおふたり廿
八町、息の限りを追詰られ、狐は死て岡部の六彌太、是も手取の高名たり。兒玉太郎が
鍮玉に、上て突しは飛鳥の業、鷹股早く飛鹿の、もと首射きる安田の三郎、竹の下の孫
八左衛門、向ふ猪に矢はたよす、打物にて切とむる。宇佐美の左衛門川越太郎、相馬の

神頭―上ざしの
鎧矢―貞丈雜記

草分―胸先

また者―陪臣

小太郎結城友昌、土屋平山千葉宇都宮、各矢先の高名有。外に牡鹿一頭、工藤左衛門祐經、秩父の郎等本多の次郎近經、一の矢二の矢の諷ひ、鹿一疋に矢一筋、祐經太腹本多は草分六分の勝に候へ共、鹿論未落居せず。二本の矢は射付の通、仍終に記す者也。御狩場の別當和田の義盛判」と讀上れば、伺公の女中面々の殿御の武藝を身の手柄、御臺所も御機嫌の御前さどめく計なり。祐經が妻阿古屋の前進み出、「聞悪き御帳面。秩父の郎等また者の本多般、我夫祐經と鹿論さへ慮外成に、本多が六分の勝とは義盛の依怙最眞。末世に残る御記録、祐經一人射留し、と書改願ひ奉る」と憚なく言上す。義盛の北の方巴御前聞もあへず、一是阿古屋殿、本田の次郎近經は秩父の家來と云ひながら、武藏源氏の歴々、軍の場数は御出頭の工藤殿も及ず。此度の御狩にも假屋奉行夜廻り御直の御用承り、御近習の御家人竝、女房にも御臺所御對面有程の筋目、誰に恐れ負ていん。義盛が依怙とは工藤殿の奥様、少口上が出來過た」と膝元に摺寄たり。阿古屋色をかへ、「イヤ昔は王の孫にもせよ、今は秩父の歩若黨、そもじも昔は朝日將軍木曾殿のお部屋、御臺巴御前。大力の子種をとらんと和田の義盛申受られ、今は我々同輩。其時々身の程知ぬ無用の本多が系圖立。然も金泥にて工藤左衛門祐經と矢印有、本多が矢に

衡—今の戲射箭
なりと倭訓菜に
あり
もどく—非難す
る

訛判—批判

遺言—遺恨か

三ヶの庄云々—
三個所の庄園を
得し近江八幡を
祐經は家來とせ
し故云ふ
家頼—家來

は假名もなき衡の的矢。狩場の法も知す慮外千萬の鹿論。お帳面替るか本多が名を消るよか。いつ迄もお願ひ」と額髪押撫て、まばゆからぬ張臂辯口。末座に著し本多が女房常夏、「是々阿古屋殿、慮外といふは馬の乗合座敷の高下、盃の前後などの事。扱は戰場にても目上の敵には太刀打も慮外と、後を見せて逃らるよな。弓矢の道不案内で小差出た訛判片腹痛し」と嘲笑ふ。阿「それくくく慮外といふが其事よ」鶯イヤ上をもどく其方が慮外よ」と、兩方聲もあら木の眞弓、詞鋭に云ひ張ける。御臺所御聲高く、「あれ鎖られよ人々。老中さへ理非を分ぬ鹿論、女の訛判及ぬ事。されば蒲の御曹司範頼入道殿、今遁世長袖の身ながら頼朝公の御弟、おりしも在鎗倉こそ幸ひよ。北の丸に請じ互ひに遺言なき様に、中分の扱御了簡に任すべし。巴宜しう沙汰せられよ」と、御櫛を立給へば、阿古屋つと立「工藤左衛門祐經と、匹夫下郎の本多と、中分の扱とはお恨しい御臺様」と、御裳袴に取付所を、常夏引きとめ、「匹夫下郎とはどれどの口から」阿「コレ三ヶの庄の、主近江八幡な、ど本多程の者は、家頼に持た大名の御前様。下郎といふが不思議か」鶯「テ、其大名の御前様息の根留ん」と、爪紅血走る扱合、百花亂るよ女中の騒ぎ。巴御前すんど立、兩足宙に俵がへし、小脇にかい込「ゐいやつ」と締たる大力、肩も

さがない―よく
ない

片荷づつて―
方のみ重くて

相手云々―不肖
は不祥にて相手
になつた災難
三巴―我名と大
鼓の紋に用ゐる
よりいひかく
升形―城門―二
の門内を云(様
訓彙)

ひける―負る

鬢もばら／＼涙、鼻息計たへ／＼なり。巴「ホウむつちりと抱心地よい甘そうな肉合。祐經殿の御秘藏が尤。さりながら、御臺様の御前であんなり慮外な口がさがない。乗物下馬迄巴が送る。我儘がいひ度ば祐經殿歸られて、夫婦閨の私語無理も我儘も睦言は御勝手。人中で我儘云へば先此ごとく、痛いかく、痛い目に逢ふぞや」と、締付く「ヤ片荷づつて力に足ぬ、相手の不肖常夏」と、片手に取て引寄せ横抱締たる弓手の小脇、下髪垂て薄化粧、二つ頭の顔の色、我顔共に三つ巴、太鼓の御門明六つの、雲ほの／＼と三重白簇の、流は同じ源の、蒲の御曹司範頼朝臣、天下の疑ひ晴さんため修禪寺にて御出家あり。法名源雄と衣を墨に染めながら、鎌倉殿の御舍弟世の覺え重けれ共、身持は輕き籠乗物。只一僕を侍にも、草履よ杖よ吳竹の、藪醫に紛ふ風情なり。大名小路の升形より、引馬に五つ道具、乗物の戸八文字に開かせ、布袋乗に乗たるは、梶原平次景高也。範頼の御乗物道を譲つて片付けば、梶原が近習共、「蒲の入道殿の御通り。下馬なさるべきか」と伺ひける。景「世捨坊主になんの下馬」と、顔さし出し坂東聲、「夫成は蒲の入道殿な。工藤と本多が扱の爲北の方へ御參るか。我ら始御留守役の大名小名相詰申。出頭第一の祐經と、陪臣の本多が鹿論は挑灯に釣鐘。鶉の毛のさき程も祐經ひける扱ならば、お爲

八枚肩一人にて昇く乗物
はいく〜廻にかく

ありゐの衣下
り居を綴りにか
けて下の衣を呼
出し衣の縁にて
たち寄りにつま
りたり

討せし討れを懸
と働かけにいふ
武者詞
貧しき家云々
本朝文粹にある
句

に能御座んまい。乗物やれ參れ」と傳へて八枚肩、徒歩脚脛やつこらさ、邊をはねては
ね馬の、人を虫共はるくく、埃蹴かけて通りしは、存外至極の無禮成。堀ぬき井戸の
方より廿計の若侍、編笠ぬぎ捨兩手を土に蹲ふたり。蒲殿御覽じ、「浪人か主持か此方へ
の會釋ならば、お通りやれく」と手を出し給へ共、只「あッあッ」と計差俯き、忍び涙に
暮ふたり。蒲殿も斯計の涙怪しと乗物を、おりの衣立寄て、驚いか成人の何ゆへに、
用有け成落涙見捨難し」との給へば、涙に沈む顔打あけ、侍直に申も恐れながら、口お
しの世の中や候。殿は忝も頼朝公の御弟、九郎判官殿諸共に平家追討の御代官、五萬騎
の大將軍。一の谷の大手生田の森を攻破、武功と申御連枝の六十余州に冠たる御身。梶
原が末子なんど我は顔の乗打、御無念察し奉る。我等が主人も伊豆相摸に名を得し者の
未なれ共、運の變に依て一族に父を討せ、本領は其者の秣かり場と成果て、昔の劔鏑浪
人、貧き家には古人疎く、世にも人にも侮づられ、いつ花咲ん埋れ木の、身の無念存合
せて不覺の涙。問はず語も御恥かし」と又涙にぞ咽びける。入道殿小聲にて、「扱は會我
兄弟が下人よな。年月の堪忍さぞ有ん。祐經君の寵に誇り、詔ひを勤と紛らし世に憂り、
鎌倉武士の風義を亂す佞臣、エ、齒がゆし得討ぬな。入道昔の範頼ならば天晴力を添ん

菰一矢竹
矢束一矢の長さ
べかつしーべか
りし

す物。もどかしさよ」との給へば、侍御覽の上は包に及ず。曾我が下人鬼王と申者。今度の御狩を武運の時と兄弟忍び巡りしに、昨日の朝山、敵祐経尾越す鹿に目を付、弓矢番ひ追駈しを、茂みの影より五郎時宗、眞たど中をと急に急て放つ矢が、敵の竹笠射かすつて、鹿の草分ずんばと當り、祐経が矢は太腹、難なく鹿は留りしが、時宗は隠れなき大力、笠廻り太く矢束も拔群。殊に名乗假名の印もなく、既に矢穿盤に及ぶべかつしを、秩父殿の執權本多の次郎近經、我こそ一の矢射たんなれ、と本多と祐経鹿論に取なし、大事の難は遁れしが、今度の御狩に討漏さば、何の世にか優曇華の曾我が天運開くべき。御賢察」と計いひさして、頭を下てぞ泣るたる。蒲殿も涙ぐみ、「あつたら勇士共世に埋もると不便や」と、懷中より木札二枚取り出し、眞是は北條時政大江の廣元兩印にて、鎌倉殿の御前迄も内意を達する割符なり。祐経が用心構へ頼朝を後楯、尺寸側を去らぬと聞。兄弟に是を貸す。何處迄も恐れなく、鎌倉殿の膝下にて、晴業の敵討花やかにして無念を散ぜよ。必隱密く」と別れ給へば、鬼王有難し共冥加共詞はたらず。御厚恩忝け涙包め共、心に漏る駕籠乗物、伏し拜み伏拜みてぞ三重別れ行。北の丸の大廣間、工藤本多が鹿論、蒲殿に扱せ穩便に濟すべしと、巴御前承り、鹿を庇に昇すゆれ

づなわ一方圖も
ない

鳥の海一鎌倉景
政の右眼を射し

人

もちかせ〜くれ
る

柘一柘栿

物打一棒のつけ
もと

ば、御留主番の大小名遠侍相詰、蒲殿をこそ待受け。梶原平次景高、祐經が一子犬坊丸、郎等八幡の三郎相具し、御廣間にのさばり出、八幡の三郎目鼻を撃め、「扱々づない大矢、御覽なされ景高公。小兵の本多が射たれば辻一間も飛物か。是を射ん者昔ならば鳥の海彌三郎、當代は淺利の與一殿。然らば矢印有筈名を書ぬは合點。阿房力の會我の五郎時宗と云ふ飢浪人、主人祐經一門のはし、毎度の無心合力、何貸せ彼貸せもらかせの驅り事も、人食ねば狩場で小盜せん爲、紛れ入たるに疑ひなし。和田殿の不穿鑿、兎角梶原殿御父子にかけねば明白ならず」とそやさされ、是「チ、サ別はない。重ねて本多めに射させて見れば、忽化が顯るよ。此矢は景高預つた」と抜んとすれば、巴「是梶原殿、其矢に指でも觸るが最期、腕を巴が引拔」と腕捲り脚捲り、紅梅もると雪の膝ぶし、骨ふとく煉絹に岩を包みし如くなり。悪かりなんと梶原、「先蒲殿が来て、扱の術に依ての事。ナフ女の力と首の無い石佛、外の用に使はれぬ、何の役に立ぬ物」と御書院にぞ通りける。物に堪へぬ朝比奈の三郎、斯と聞より御番所の柘の棒ひつ提て、駈込所を母飛懸り、棒の物打掟と取、巴「ヤイ、餓鬼め御殿中を知ぬか。騒ぎを止め穩便に納めよ、と御意を受た巴が子、此棒で誰を打」斬「チ、會我殿原を盜よ驅よ、父義盛の不詮義と吐した奴等、素

あんばく一梶白者、いたづらも
の
役身を云々―巴
ウンと力を入れ
て朝をもち上る
朝腹に云々―朝
飯前の空腹にて
大力の母をもて
餘す
六々鱗一鯉の
軍、鯉の鱗は頭
より尾まで其數
三十六枚ありと
いよ
謂つべく―謂つ
べしか
かたむくる―頑
固

頭打碎く。怪我なされな」と捻上る。巴「コレヤ打碎く程なれば己は頼まぬ。あんばく者め
又捻餅喰たひか」と、片足舉て真中より、棒を發矢と踏折つたり。朝「梶原め八幡め殿殺し
て退ん」と、飛で出るをむんずと組めば、朝比奈兩手を差込で、親子四つ手に取組んだり。
母も母なり子も子なり、汗を貫く頬髭と、風に亂るよさげ髪、朝「すべり出たは母の腹、
今は我等が腹櫓」と三尺計釣上る。巴兩足踏放し、我身を重りに持上れば、朝比奈も朝腹
に、大力の母倦果、釣下しつ釣上しは、龍の氣ざしの六々鱗沸つて落る水の勢、鰭を敲い
て龍門の、瀧登共謂つべく。母はね返し一放れ、大の男をひつ擔き、どうと落す其響き、
祇園精舎の釣鐘を、切て落すも斯やらん、御殿も揺ぐ計なり。泣顔にて朝比奈、むづく
起る胴骨膝に引敷き、巴「エ、疎ましの荒者め、親に世話を採するなア。かたむくるに會我
を引、おのれは最眞の引倒し。文武二道の弓取とて強い計が武士でなひ。又しては切て
の投てのと、手習は否がる物讀は嫌で、和田の家が嗣るよか。サア今から手習するか」と
太股を、ふつくくと抓られて、朝「あ痛くあ痛、手習しましよ」巴「物讀するか」朝「讀まし
よく。あ痛たよ」巴「母がいふ事聞ねば又是じや」朝「あ痛く」巴「捻り餅の味忘れな
く」と、ふつくく抓り引起し、「行義よふして遠侍に相詰、何事有ふとお廣間へ差出

身柱云々一項の下に爰一つすゑうかと也

畝火山云々萬葉集「高山と耳梨山と逢ひし時立ちて見れば」との歌に由る
瀬口―御所を守る武士

山の甲斐―山と山との間をかひといふそれにかけたり

て慮外りよぐわいしたらば又是また是こゝじやぞ。まだ怖こはい目付止めつけやめぬか。身柱ちりけに一炷ひとしすへふか」と、威おこされてお次つぎへたつ、灸嫌やいごきひの髭男ひげをまこ。短慮やまひの病母親やまひの、異見くつりもぐさなるぞ藥艾くすりもぐさ成なる。程ほどなく「蒲殿御入いり」と廊下らうか番衆ばんしゆ取次とりつひば、梶原始はじめ犬坊八幡出向やふ。蒲殿暫しばらく鹿しかに目をとめにつこと笑わらひ、「なふ巴御前そのあらせ、寶たからを諍あらせひ地を争あらせふは人間世じんげんの欲心ほめたま。それとは替かひ是こゝは優やさしき弓矢ゆみやの藝げい。其諍そのあらせひは君子きんしなりと孔子こうしも是こゝを譽ほめたま給たまふ。位争くらゐあらせひ、歌争うたあらせひ春秋しゅうしゅうの詠なめを争あらせひし、雲うへびとの上人ふうごんの風骨ふうこつにも劣おとるまじ。心憎こころにくさよ優やささよ。爰こゝに一つの物語ものがたり。昔むかしのくくとつと昔むかしの其古いにしへ、大和國天やまとくにあまの香久山かぐやまといふは女山めやま。又畝火山耳無山うねびやまみみなしやま此二山このふたやまは男山おとこやま、香久山かぐやま姫ひめのあて成形なるかたちに想おもひをかけ、畝「我妻わがつまにせん」耳みみ、いや我わがこそ」と山と山とが妻諍つまあらせひ、夜毎よごとに谷峯震動たにのねんどうす。出雲いづみの國くににおはします阿暮あぼの御神みかみ、是こゝを扱あつかひ止とどめんと、御船みぶねを走はしらせ給たまふと聞きキ、二つの山ふたやまは中直なかなほり。あほの神かみは播州印南野いたみのに神かみとどまり在あります。此三つ山このさんやまの争あひ、中なの大兒おほなの御歌みうたを萬葉集まんやふしふには載のせられたり。今の世よ迄までも美目みめよき女めをお山おやまといふも、此香久山このかぐやまの謂いはれ成なべし。惣おじて物の扱あつかひには心こゝろなき山の甲斐かひも有あり。況いはんや文武ぶぶの工藤本多こうどうもと、入道にちだうが扱あつかひ不足ふそくはあらじ。諍あらせひを親したしみの始はじにて、上下相和あひひするこそ、源氏長久國家安穩げんじちやうくわがやすみの基もとなれ」と、御詞みことに花實はなみを交ませ、面白おもしろ可笑わかしき御扱みあつかひ。巴悦こゝろなづび小領こゝろなづき、お次外様遠侍つぎまへさまとほざむらい聞傳きくつたへく、「あつ」と感あずる計はかりなり。につこり共ともせす

謂れざる云々！
無用の詮義立
附なりと云

梶原、「イヤサ濟ぬく。第一本多めが射に似ぬ大矢。殊に的矢は業の矢とて、親の敵を射る故實あれ共、鹿を射る法はなし。サア矢の主の詮義く」とせり懸れば、蒲殿も當話の返答猶豫して見へけるを、犬坊八幡聲を揃、「但本多が親を鹿に突殺され、其敵射たるか。何んとく」とやりこむる。お次に朝比奈堪へ兼、襖半身出んとす。母きつと見て、「又なく、捻り餅身柱一炷すへふか」と、睨付られて身を縮め、引込顔こそ殊勝なれ蒲殿ちつ共臆せず、「百様知て一樣知ぬとは御邊が事。的矢を業の矢といへばとて、惡業の業と心得、親の敵をる事と故實を一ッ偏に覺へしな。是常に射馴て矢業よき故、わざの字の聲にて業の矢といふ義なり。鞞胡籙に的矢一手入ルは、侍所瀧口の骨法。親の敵に限らず烏をも鹿をも射る時有。長袖と成たれ共、家に生れ弓馬の道は入道こそよく知つたれ。謂れざる詮義推參なり」と、御氣色變つての給へば、「イヤサ主人祐經を、曾我兄弟が親の敵と狙ふよし、念を入が僻事か」詈「ヲ、さもあればこそ頼朝の膝本離す用心する祐經。曾我兄弟に翅はなし何を知邊に御前近く忍び入べき。用心無用」と仰せも果ぬに、梶原「イヤく、祐經が出頭を妬嫉む者多く、曾我を引御前通路の割符の札、彼等が手に入まい物でなし。御身の方にも、彼札二枚受取て置れしが、散さず手まへに有ならば、サア只今

必説―必定

まねき―烏帽子
の上部三角のひ
れ
犬坊―往ぬにか

是にて一見せん」眞「ヤア御邊に咎られ是に候梶原殿迎、おめくくと出すべきか。大事の切手汝等には見せぬく」眞「扱こそく見せぬは曲者。會我に割符を呉たは必説。推量は違はぬ蒲殿、ヤア蒲焼殿蒲焼の鰻入道殿。ぬらくら抜ても抜させぬ」と、悪口雜言手詰になれば蒲殿も、無念餘つて一世の浮沈急き逆上たる顔色。巴御前は根元知らず何事やらんと氣を盡し、心を配つて控へたる。眞「是梶原、入道が受取の割符紛失せば何とする」眞「ヲ、會我は伊藤が末天下の怨敵の引入。能仕合で切腹く」眞「ムウ入道が切腹には冥途の供を召連るゝが合點か」眞「洒落臭い誰を供に」眞「梶原平次景高を連るは」と、衣の下薄氷一尺二寸抜討に、はつと飛退く梶原が、烏帽子のまねきを切落され、後の障子蹴破つて、同じく逃て犬坊に、續いて逃る八幡が肩骨脇つほ迄切下けられ、「うん」と反を取て押へ、心元を三刀刺し、死骸にどうと腰打懸け、一息ついで立給へば、お次外様の騷動上を下へと返す音。巴御前大音あけ、「蒲の入道殿子細有て八幡の三郎をお手討。騒ぐなく。御所へ走御臺所へ注進申せ。御用なき者此内へ一人も叶はぬ」と、戸口に立て呼はりしは、木曾殿の後家義盛の北の方ぞと物々し。其隙に蒲殿衣脱捨齒嚙をなし、「エ、打物短かく梶原めを切損じて口惜く。八幡殿五十人百人成敗せしとて、誤る筋はなけれ共、割符

早打—早飛脚

課辱—讀責

姪—あいやけに
同じ

の札の御詮義一度は切で叶はぬ腹、世に健氣成會我が爲捨ん命、遁世の身の悦び。道引給へ南無歸依佛」と、小脇に突立引廻し、返す刀の刃先唾へ、眞逆様に貫かれ、二十五歳五月間、短き夢と消へ給ふ。御臺所の御使者として重忠の北の方、いてう御前徒跣足にて駈付、榛谷の四郎重供二の宮の太郎安清を召出し、「榛谷は死骸共御預け、二の宮は富士野へ早打、蒲殿御切腹會我兄弟御狩場に紛れ有よし、狼藉なき中急度御詮義遊との御口上。晝八ツの時切、半時の半時違ふても越度、課意仰付らるよとの御意。大事のお使早うく」二「畏奉る」と駈出る、刀の鎧榛谷の四郎掟と取て引留「こりや待て二の宮。御分は會我の姉聲。小舅の難義する御使眞直には得云ふまい。役替して死骸受取れ。富士野へは身が罷る」と引戻して駈出す。榛谷が鎧二の宮搔擱んて呵々と笑ひ、二「和殿は祐經と。姪。祐經を引心から此二の宮を疑ふな。似よふたく。ヤイ一門縁者の好と御奉公とは各別。ム、疑を晴して見せん」とどうと引据、床の硯引寄せ三行半にさらく去て去状、裏さしの笄、「暇の印」と巻きこんで、家來の侍呼寄せ、二「宿所に歸り、女共三世の縁の切目なりと申渡せ。富士野のお使會我と他人の二の宮太郎」と、いひ捨て駈出す。袴腰むんすと抱留、姪「人に心を許させんとさつぱり立受とらぬ。御使は榛谷の四郎重供が

業を沸す一怒に堪へぬ

時切一時が定つては、はんがいの榎谷にかけて櫓の事、中は空、何の力もない事、初夜云々、初夜には諸行無常、次は是生滅法、次は生滅滅已、次は寂滅爲樂と響くといふ

乞受る。是非に遣ぬ」と引留たり。「エ、面倒心急ぎ、五ツの時に程もなし。廿里に餘る道三時切の早打、天狗の羽をも借たい所、時刻延して二の宮に腹切せん工よな。腕ぶし切放す奴なれど互ひに御用蒙る身。騒動のうへの騒動命は助ける爰放せ」と、捻ても押ても様谷少力増し、總付て動せず。お次に朝比奈身を揉で、齒痒くまだるく遣戸口より身を半分、齒齧を爲しても母の怖さ。すつと引込によつと出してはずつと引込、業を沸して睨む顔、巴御前きつと見て、「やれ朝比奈ちやつと来てあがけく。許すく」朝、チ、まつかせ」と踊出、「母の御免じや忝し」とつよと寄り、棒谷が兩腕取て捻上、「サアお往やれ二の宮」二急用のお使、物申すも暇惜」と、云ひ捨断出し走り行、二の宮を遣からは我等に何の云ひ分。爰を放せ朝比奈」朝、チ、二の宮は時切おのれを宥すも時切。知行潰しの米櫃飯櫃かけはんがい、片手に足ぬ中は空との明はんがい。御時分能らふ朝比奈が、握拳の握傲、喰ふて見よ」といふ空の、霞におつる鐘の聲、ごんと鳴は、くわんと喰はせ、又ごんと鳴るくわんと撲る。ニツ四ツ五ツ頭の、頭で數とる拍子取、次でに初夜後夜晨朝入相寂滅爲樂、跡はひらくと天窓の骨、碎けて百八ほんのくほ、つまんで小庭へどうと投げ、「思へばく、梶原め釣髭の釣鐘面、撲碎かひで残念至極。よし、今は逃

百八云々―百八
煩悩にかけては
んのくぼは項の
凹所を云
鰐百倍―鰐に見
込まるれば遁れ
ぬ夫よりは百倍
と也
女波男波―巴と
朝比奈をさす

片そぎ云々―神
社の屋棟に組合
せたる木は必ず
一角をそぎより
片そぎといふ神
明のあらたなる
を云ふ
縁日―不動の縁
日は毎月廿八日

す共我見迄だは鰐百倍、一度はとらで置べきか」と、日数を泳ぐ生死の海、淺瀬は波も朝比奈が、待來る寄せ來る磯の波、どうく、とどろくと踏鳴す、女波男波の足はやく、鰐を並べてひともつれ、ともに御所へぞ参りける。

第 二

片そぎの千木や内外の曇りなき、空も五月の二十八日、式日の御祝義に、二の宮太郎安清出仕の留主の間には、夫に代る武士の妻、心の障身の不淨、手水の水に灌ぎすて、袋柵より取出し、紐解大聖不動の尊像、「五月なり縁日なり」と、床に移せば女子共、供へのお神酒お鏡に、向ふ心の眞直成、冥慮で暗に有難き。二の宮の姉御前心靜に合掌し、「夫の武運長久御狩の御留主預りて大切の役目、禍のない様に、取別け弟曾我の祐成五郎時宗、一万箱王と申せし時、不動を工藤と聞違へ、勿躰なくも尊像を、切奉らんと迄思ひ込たる、親の敵工藤左衛門祐經を、首尾よふ討せたび給へ」と、只一筋の念願は、感應嘸と著し。家來白崎八平次遠敷「旦那より火急の御用。参りつけねど御居間へ」と、御免も乞す大息つるで畏る。女房驚き、「何の御用か氣遣はし。御口上は」と問けれ

お身—二の官を
さす
語らひし—原本
かたらし

はした—下婢

ば、ハ「何れも同じ御奉公とは申ながら、斯る御使身に取ての大難」と、巻込暇の印の筭一通を差出せば、開いて見るや見もわかず、はらく涙の顔振上、「お身も息才御武運も長久と祈りしはたつた今。御出仕の折迄も云ひ語らひし數々は、捨詞か空言か、恨めし的心や」と、巻ては解き讀んで泣去狀顔に押當て、思はずかつばと身を投伏し、聲も惜まらず泣居たる。有合ふ腰本下女はした、様子知らねば泣れもせず、互に顔を見合せて、溜息ついたり計なり。斐「コリヤ八平次、どふしたことで隙やると御口上は無りしか。様子は知ぬか知たらば聞かせてくれ」と、氣を急ば、ハ「委細の事は存ぜね共、祐成様御兄弟、蒲の入道殿に方人なされ、頼朝公を討奉らん企と、梶原殿の詞に依て入道殿には御切腹。それ故旦那は御狩場へ御注進のお使。八ツ切との仰せを請、榛谷と又口論有。御暇の狀印の筭、渡し申せと仰せより外には何も存ぜず」と、いはせも取ず斐「ムウ聞えたく。安清殿は最早狩場へ御座つたか」ハ「イエ〜御前で口論最中。今比お立も存ぜず」と、聞捨てずんと立、脛高々と帯引締、斐「誰足早な女子共、長刀持て追付」と云ひ捨て断出す。各慌縄り付、「お里へでは有まひし、恨云ひにお出遊ばすは御道理と云ひながら、殿の御歸り待受て佗なさるゝが能管」と、止むれば振放し、斐「退去も有習ひ、我身の事は兎も角

まだ、まだ
るい事（俳言集
覽）
長刀の道―長刀
の身にかく
移る―映る
空尻馬―人を乗
せぶ爲僅の荷を
負ふ馬
糸筒―細き流れ
柳影―西行の道
の邊に清水流る
る柳影の歌によ
る
葉盛―御食津の
神

心太―石花菜に
かく
聞召―めし上る

も、其儘狩場へ遣りましては、今の恨つらみより、増つた歎も有ふかと思ふ故、搔たぐ
る程氣が急く物。まだ、待ていられうか。八平次お留主大事にせい。皆の者共頼ぞ。
と、端女一人引具して、振かたけたる長刀の、道を反せて三重鳴る鐘の空四ツあがり、藤
澤や澤邊の水に富士移る、雪さへ暑き夏の旅、空尻馬も徒人も蒸くる雲に雨を乞ひ、一
吹さつとくださると。涼風價千金と、行惱む道の傍に、葭笥園ふて杉葉蕒、清水堰入
水車、懸樋の竹の糸筋に滴る水の柳陰、暫しとてこそ旅人の、立寄る所天下一、根本仕出し
の家と、看板冷やり氷室山、氷突出す染付の南京すどし錫の皿、樽折しく青楓櫛の葉もり
のたよりなし。霍亂藥咽にはや秋風通ふ見世商ひ。主は久上の禪師坊、今度の御狩に
祐成時宗、年來の本意を遂げ、富士野は兄弟が命の露の置所と、便密に寺を出、御骨成共
拾はんと、懸鬢髪に姿を替、十日余り此營み。御狩場見廻の諸方の使、大磯通ひ鎌倉の、
商人旅人暑を避て、上り下りの其中に、祐經が家來近江の小藤太、鎌倉への歸るさ見世に
たちより立寄、「コリヤ、亭主水呉い」とぞ大柄成。禪やすいこと。同じくは心太になされたら、
そつちもこつちも後藥。暑氣を去て渴きをとめ、二日酔のよろくも一膳食へば心太、
頼朝公も聞召し、大名小名御相伴の御膳料理。前代未聞のところてん、扱も甘しと舌を

列卒一精を入れ
を洒落に言ひか
へたる也

吳須手一支那で
きの磁器

高すへて一高を
括つてか

遣上云々一えら
さうに食つたが
其反對で金持た
ぬと也
身の楯云々一身
の恥やら色々の
状を面白く語る
と也

まきがり、随分商ひに列卒を入、往來の人の腰錢を狩とるべしとの御詮にて、見世先に富士を作り、御狩の躰を人形にて、水機關に仕懸てお目に懸る。サア只今始り」と聲可笑しくて拍子とり、御寮の其日の御賞瓶、青葉涼しき心太、おなかよしけに一二膳、白皿受て召れたり。御相伴には五郎丸、赤繪吳洲手の錦皿、下し給はつて是で喰ふ。價は八十五文が所、燃立腹を涼やりと、四尺八寸の水船一尺八寸の突出し、十文字に突ままに、白木の丸箸右手の小腕に持添て、酒もすこし奉る。秩父殿は精進汁、花柚散して進まれたり。和田の一門九十三膳、代物合せて三百八十四文なり。千葉小山宇都の宮、いづれも辛子はお嫌ひにて、砂糖大豆の粉のつこ此、このくくく高すへての暴れ喰い、皿も錫猪口も錫、箸打音がざよめいて、さしもに廣き富士の裾野に、膳の据場はなかりける。去程に三千人の列卒の者、三日前から仕過しの潛上のまつかへさま。巾著振ひ底を叩いて是で御免と侘るも有、身の楯紅葉色々の品を並べて人形に、人の氣を汲水車、水機關も鹽梅よき舌を廻して語ける。亭主もほつと息つきに上下を見廻し、「あれくくく束から、乗物に綱付て人足が引てくる」少ムウ乗た人が笑止や、脇が揉切ふ「禰ハア、急な用そふな」少「飛はく」と云ふ方より、順風の帆懸船坂を下れる車の如く、ゑいさ聲し

ところてんがう
心太にかく、
てんがうはいた
づちをいふ
さ鉢―皿鉢
ひら皿―ひらに
にかく

まつかへさまに
―あへこべに

てはや乗物、見世前にどうと下し、人足に戸を開かせ、乗手は白布に胴骨巻たる仰々し
き。密「コリヤ、亭主鎌倉から富士野へ、乗物でも馬でも早打は通らぬか。隠さず共申せ」
といふ。密「ハテ損も徳もない事、見たらば何の隠しましよ。早打にも遅打にも今朝か
らはこの乗物計」密「よいはく水一つ」と振仰いたる顔と顔、小藤太急度見付、「ヤ梶原
平次景高公」密「さいふは近江の小藤太な。能所で行合ふた。咄す事行近ふ寄れ」と、招
き寄すれば禪師坊、是ぞ聞及ぶ敵の家來。様子は聞たしところてんがうする顔で、によ
つと突出す鼻の先、「こりや何しおる」と、梶原が睨付る眼はさ鉢皿打落し、豆の粉はい
に砂まぶれ、「ひら皿御免」と入にけり。「してく、狩場に別條ないか。いづかたへ」と
問ければ、小「さん候主人祐經、本多と矢を諍ひし大鹿鎌倉へと承り、風聞いかど聞て參
れと申付、鎌倉へ」と云はせも敢ず、其鹿ゆへに祐經殿降て沸たお仕合。蒲の入道に
も辯舌を以て腹切らせた。曾我兄弟の奴原も、此筋から罪に落し縛首打つ工面。去なが
ら氣の毒は二の宮太郎。御注進の使、八ツ切に御狩場へ行等。女房を去て曾我と縁は切
たれ共、彼を遣ては兄弟が事悪ふは御前へ申まい。某先へ断拔てまつかへさまに言上し、
曾我の根を絶さんと只今狩場へ行所。二の宮がまだ此所を通らぬこそ重疊く。御邊は

足だまり—木の
根を踏へ所とす
下から云々—下
下の人が見ても
近江は小人物に
見ゆと也

あの藤澤寺へ登り、住持に逢ふて申そふは、「工藤梶原兩人が頼入、今日九ツの刻限を八ツに打替給はらば、恩賞せん」と賺し込、彼高所から下を見下し、馬でも駕でも早打と見るならば八ツ鐘を撞せよ。其時は我分別有。若し又住持が否と云はど片端に引括り、御邊鐘を撞たがよし。下人も連て急げやツ」と景高は心太屋に入にけり。近江は僕を引具して、見上る寺の總構數十丈に山聳へ、常に參詣稀なれば、偶々登る人とても道は木の根の足だまり。眞砂交りに石高く、赤土露に踏迂り岩角荒き荒男、手を引腰押やうやうと、門外に吐息つぎ、「ハ、ア見ゆるは三保の松原清見寺。釣船も漕で行。扱涼しひは氣が晴るは。海道は糸引如く、嶺から見れば籠の人が小そう見へる」下から見ても斯ぞとは、我身を知らぬ愚人共、方丈に案内す。住侶立出對面ある。近江の小藤太慇懃にかぐの旨相述べれば、住僧更に心得ず。住「工藤梶原の御頼共覺へぬ物かな。鎌倉には鶴が岡の撞鐘を以、御番諸役の常規とし、當寺の鐘は二十里四方諸職人諸商人、往來道路の刻限を極め、君より寺領頂戴す。私に刻限を違ゆるは諸民を迷す大罪。勿躰なし」叶ふまじ」と、云はせも敢ず飛掛り取て捻する、小「御出頭の工藤梶原殿のお頼を聞まいとは。家來共、坊主めら一人も残さず引括れ」畏て取ては締付捻倒し、一人も洩さず猿

香嵐一夏の犬風

白柄一知らせる
にかく
も身が云々も
身が大じ

空さぬぬから
ぬ

繫ぎ、「聲立さすな一所に追込錠卸せ」と、引立奥へぞ入にける。嶺は吹まく青嵐、海道は蹴上の土煙、一文字に来る人は二の宮の姉御前。夫の安清が暇の狀三行半分讀目も聞く、涙絞つて鉢巻しめ、恨を夫に思ひ白柄の長刀かひ込、走道芝照付て火を踏ごとき焼石原。下女は附兼息切し、「申奥様ちとお休み。何を申もお身が有ての事。日が眩く息が絶へる」と呼はりく行先に、昇するたる梶原が早乗物。妻「サアあれが我夫」と女房乗物取廻し、「是太郎殿安清殿、今朝曉の鳥鐘も一つ枕に聞た中。何を悪日に離別とは。女の夫に去るよは、軍に後見せた同然。削つても此恥辱は遁れぬ。日影者の會我が姉、御助氣の者の末などと、傍輩の佞人共に云ひ廻されての去狀か。いづれの道にも直に返事が聞たい」と、長刀構へ立たる所に、茶やの床几をそろくと梶原平次景高、長刀の柄をむすと取、「此乗物を二の宮と見違へて、おのれと名乗因果晒し。梶原平次景高を知らぬか」と、呼はれば下人共、一度にはらりと取廻す。妻「南無三寶人違へ」と、胸は騒けど空さぬ顔、長刀をもぎ放し飛退つて身構へす。妻「コリヤ女、佞人の傍輩とは誰こと。サア誰々を指て佞人。惣じて會我に好みの奴原、世に有者を妬嫉僻根性。安清の今日のお使も眞直には云ふまひと、某遮つて、急ぐ御用に對して狼藉者。餘すま

八相―八方

ところてんどろ
―顛倒にかく
妻―夫の事蹠手―鞍の所輪
後輪に著くる紐
の所

じ」と主従拔連れ打て懸る。妻、ヤア夫を出抜く梶原、長刀の刃を戴け」と、八相に振て懸る。上を學ぶ下女、腰の刀ぬき放し大勢相手に主従二人、切結ぶも女業。鷹こつちへ任せ。是こそ望む心太、商人が手並を見よ」と、山椒の粉胡椒の粉、ヲツ辛芥子それより辛ひ韓紅、唐辛の粉を攪込、水桶に酔も醬油も掻交く、突出ンを水弾、群り懸る雜人原顔を目當に、しゆつと突出す胡椒辛子の水鐵炮。唐辛子の石火矢ゆん手へ廻つてしやつぶり、め手へ廻つて又しやつぶり。鼻を突抜噴嚏咳逆、辛い涙に目玉も飛で、咽はひるく火花を散して三重防ぎける。口も明れず眼も眩む。蕎麥切料理に打立られ、ところてんどろ敗亡し、梶原主従八方散々逸失れば、「餘さじ遣じ」と禪師坊、跡を慕ふて追断ける。妻、中村宿の方よりも、馬煙り霞を蹴立矢を射る如く乗來るは、妻の太郎安清殿。サア生るか死ぬるは此所。あの馬留よ」と云ふ程も、家來に乗ぬけ稻妻走り、尾筒を左手にから巻ば、下女は鹽手をかい握み、止ても止らず十間餘り、引摺れても猶放さず。跳上る馬に輪を懸て鞍づよに堪へしは、造り付たるごとくなり。安清はつたと白眼んで、安、廿里を三時切のお使、仕損じては一期の不覺、恥を知たる男子成ぞ。尾籠至極と乗出すを、又引止め鐙に絶り、妻、つれないぞや二の宮殿、恥を知は男子計か。去狀受る

宮仕一奉公

馬糞一鞍の上の
敷比

差構ひ一故障を
いよ

女の身、是に上うへこそ恥辱ちじよくはなし。二人の弟が豫かねての大望たいまう、後見うしろみは石鐵いしがねの楯たてよりも、頼たのに思ふた甲斐かひもなく、お暇いさまと有からは兄弟が事も頼たのれぬ。見る影かげもなき會我あいが殿原との、よしな縁ゆかりを結びしと悔くやしい顔の色いろめも見せず、もてなし給ふ心に惚ほれて忝かたじけなく起臥おきふ立居たちゐ一命懸かけての宮仕みやつかへ。見落みおしでも有事うじか、負まうき會我あいがの惡目あくめが、今日けふといふけふ見へ初はめしか。兄弟への面當つらあてか、兄弟を見放はなす氣きか。佗わづしき身みなれど河津かづが娘むすめ、道理たてが立たねば暇いさまの狀さまは受取うけとらぬ」と。馬糞ばせんに投付なげつけ給付たまはつ。憂うれさと恨にくの諸手もろた綱絞ななしほる涙なみだぞ哀成あはれ。安清やすしよせいたる顔色かほいろにて、ひらりと飛下とびおり木の根ねにとつかと腰打こしかけ、「暇いさまを呉くれた女むすめ、詞ことばも交かさぬ筈はずなれ共今迄ともの好よし。聞きかずや今朝けふあした北きたの丸まるにて會我あいが兄弟あいらいより事起ことおこり、蒲よもぎの入道にりだうの御切腹ごきりばし鎌倉かまくらの騒さわぎと成な、御詮義ごせんぎの筋目すぢめに依よつて、兄弟が命いのちの大事だいじと成なり細有こさいにより、密ひそかに老中らうちゆうの耳みみへも達たし、首尾能しゆびよく事ことを治なめ、心こころは先まづへ飛折とびさかふし、御臺所ごだいどころより、狩場かりばの御注進ごしゆしん八やツ切きりとの御誼ごごころ。願ねがふ所ところと有あ難がたく畏かしこまつてお受申所うけまを、榛谷しんやの四郎差構しじろさしかまひ、「會我あいがに縁者ゆかりの此こお使心つかいこころもとなし」と、押おへ諍あしそひしより心づき、北きたの丸まるの殿中とのちゆうにて見事けんじに去狀書きさうがたるは、縁者ゆかりを離はなれ諸人しよじんの疑うたがひ晴はし、他人たにんの義理合計ぎりあけいを以もつて、思おもふ様に會我あいがが肩かたを持もたん爲なすの離別りべつ。飽あかも飽あかれもせぬ妹脊いもせの中なか、此こ外安清べつあんせいに別心べつしんなし。往還驛路わうくわんえきろに姿すがたを晒さらし、吠廻ほえまはる程添度ほどば、元もとのごとく二世にせも三世さんせも變かは

らぬ夫婦。然るうへは見苦しげに縁者の依怙最眞罷成ず。兄弟老母の身の上どう成ても構はぬぞ。必我ばし恨むるな」と云ひ捨て駈出す。巽待て下され去れませう。武士の情の離別とは、夢にも心付にこそ。去狀を見てはつとせき、安清と縁切れては、祐成や時宗が片腕を落されたるも同じ事と、悲しやら口惜しいやら、一圖に腹の立計。外の譏無き様に他人に成て兄弟が、力にとの誠の心、涙が溢れ忝い。巽へ此身には不義有と成共、いか成疵を付て成共、兄弟の爲ならば離別してたべ去つてたべ。暇の狀をたべなふ」と引止むれば、安「見苦し。といへば斯くいひ、時切の御使仕損じ腹切が見たいな」巽のふ情ない事いふ口で去と一口云れぬか。佗言しても夫には添たひが女の習ひ、望で去ると淺間しさ。男も女も會我一家の、是程かたの悪さは」と、包み兼たる涙のさま、下女が目荒き帷子に涙の玉をふるひけり。安清不便に堪かね、一ヲ、神妙にも聞分し。今日より他人の印ぞ」と、受取渡す名残も、袖もふり切出る頭の上、一聲驚く鐘の聲、二の宮はつと指折て、三ツ四ツ五ツ六ツ七ツ八ツ「南無三寶早八ツか。九ツの鐘を何としてか聞洩せる。閑雲鐘を隔つといふ事を忘れしか。富士野へはまだ程も有。刻限違へば榛谷との口論無下と成、一生爰に極つて、會我の運命我運命一ツ時に盡たよな。口惜や無念や」と、大地

閑雲云々一雲に
閉ぢられて鐘が
聞えぬ、鐘は寒
雲を隔てて聲の

至ること遅し
諸世能野に引け
る百勝抄の句

與力一梶原助勢
の兵

二天一多門天持
國天也之に増長
廣目を加へて四
天といふ

を掴み拳を握り、せきくる涙とどめても止め兼ねて見へにける。梶原平次景高揃の足輕數十人まつくろに駈付、「ヤア〜二の宮時切の早打、刻限相延御注進の手筈相違。其咎輕からず、切腹させ首を富士野へ持參せよ、とお留守居中の評定極り、檢使は梶原承る。腹を切れ」とぞ罵しりける。安「いふ迄もなく刻限違ふは安濟も覺悟。人の腹を借ても切らぬ、人にも切て囉ふまじ。首持參迄もなく、頼朝公の御前にてさつぱりと切て上覽に入る首。御邊などが苦勞にも預らぬ」と、又駈出すを且待々々。腹切かぬる臆病者、家來共引つとんで打殺せ」家「承る」とひしめけば、女房同じく二の宮にひつ添て、打合さんとせし所に、禪師坊いつの間にかは登りけん、藤澤寺の岩頭に大音聲。「是々龜忽なされな。時が違ふた」と呼はれば、與力の下人聲々に、「ヤア面倒成下主め。住持を始同宿迄繩は解て助おる。投殺せ踏殺せ」と、掴付を取て引寄せ、罵ゑいと擔いて「うん」と投げばころくと、二の宮が足の前轉び落るは梶原が揃の足輕。「扱社」と安濟も、上を白眼で突立たり。續いて懸るを組つ轉づ眞逆さまにすでんどう、小首を土に打おつて、きやつと計に死してけり。小藤太怒つて「己に負てよい物か」と、放逸無慚の噴毒を張つてしがみ付。禪師坊二天四天の威をかつて組合たり。上に成り下に成り起つ轉んづ組合しが、片

岸を踏崩し中ごし迄、ころび落れど兩方放さず放しもせず、さす股に踏張て暫らく息をぞつぎにける。下には安清姊御ぜん身を冷して待懸る。禰「サア來」と聲を懸け、一揉二揉枯木を倒すごとくにて、梶原が目の前地響打てどとうど落る。透さず近江を取て押へ、馬乘に跨がれば、平次景高はつと驚き、長追せば猶氣味悪しと、跡をも見ずして逃失せける。二の宮續いて追駈る。禰「暫くく。一大事の御用先。逃ば其儘逃されよ。なふ二の宮姊御前」と、鬢髮搔投捨、「我こそ弟稚名はおん坊。久上の寺にて法師に成禪師坊と申者。様子は緩々申べし。梶原が指圖にて、當山藤澤寺の時の鐘。九つを八つに打替、安清殿に腹切らせんと企。空は曇つて見へね共、まだ日は晝に傾かず。早く狩場へお出」と云へば、二の宮はつと嬉しく、「近江は刻限を違へし大罪人。法のごとく討捨」と、取て引寄首打落し、三「これも曾我の敵の枝。暇の印」と打出し一さんに駈出す。二人も跡を見送りにて、泣て別る。雨雲の、絶間に漏る鐘の聲。數へて見れば二ツ三ツ、四ツ七ツ八ツ、又九ツと勇み行き、遠ざかり行駒の足、戀せぬ身にも思ひ知る、飽ぬ別れの曉の、鐘に涙はかゝる共、夫の武運長久と、又逢事を待宵の、鐘に契りて別れける

待宵—待宵の小
侍従の歌待の
の更行く鐘の聲
聞けば歸る朝の
鳥はものかはし
(平家物語)

第三

龜菊が髮筋—女の
の勢力の強き
事、徒然草に女
の髮の毛にて大
象を繋ぐとあり
こけざる—轉げ
ると老猿

小男鹿こせしかのいる野も山も聲々に、列卒れきそを揃へて狩かりにけり。工藤左衛門祐經、「打ませの狩に
は鹿論しかろんも事喧ことやし」と、便たよりよき岡邊に場を構かまへ、手の者組徒くみこに鹿猿しかざる狩かりせ、遊君木瀬川きせがはの龜菊かめぎくと、
床しやうぞ几ぎを並べ酒肴しよふか前まへにつらね、鴉くヤア〜者共色有君いろあるきみが見物けんぶつ。豕ぶたでも鹿しかでも一疋生取り、龜
菊が髮筋かみすぢにて繋つないで見たし。精出せいだせ〜褒美ほうびを呉くれる「畏かしこまつ、た手取てとにせよ」と、我身知らず
の猪武者いのしゝ、猪いのしゝに駈散かけちらされ鹿しかに突つかれて吠ほるも有あり、熊くまと組くみで眞逆まがさかさまにこけざるが、頬ほ
骨搔裂ほねかき血まぶれの、面つらは猿さるより赤恥あかぢかいて逆さかるも有あり。口は手柄てがらのゑい〜聲、おめき叫こ
んで三重さんじゆう狩暮かりくらす。獵れつのきかぬも時の興きよう。祐經すけえき盃さかずきを受うけながら「なんと龜菊、諸大名の假かり
屋や〜、呼よぶと傾城けいせい白拍子しろびやうしも多おほからん、身みに揚あげられたは仕合しあはせ。猪狩肴しかりさかなに酒盛さかもりとは、鎌倉
殿の御臺所も叶かなはぬ榮耀えいよう。か程ほどに思おもふ祐經すけえきに廻まり様やうがそうでない。そでない〜」と寄より
添そば、龜かめ否々いやい上うべ計けいの眞實まことなしとは是この此殿このどの。毎夜まいや〜龜菊かめぎくには留守るすさせて、お前は御所
の假屋かりやに寐ねて、つるに寐姿ねがた見みせもせず。思おもふとはしら〜しい。鎌倉かまくらの奥様おくさまの關せきの戸かどが
嚴きびしいか。奥様おくさまの文ふみをそれ肌はだに付つてじや。狩場かりばでは此龜菊このかめぎくが關破せきやぶり」と、懐なつに手てを指さし入れ

心ざし―祐經を庇護する志物にならずの野良者―役に立たぬごろつきのなまけ者

我も好み云々―龜菊も曾我に好ある故祐經の詞耳に障ると也せごう―背甲なるべし

ば、祐ハア、拜むく。ゆめく倍氣の文にてなし。祐經が身に取て一つの難義。いでさ
らば懺悔咄して聞かせん。定て大磯の虎化粧坂の少將が噂でも聞つらん。曾我の十郎五
郎某を親の敵と。狩場の群集に紛れ入て狙ふと聞。安と彼奴等に呉る命でなく、身用心
の爲君のお側を離れず。夜るは御所のお次に寐る其究屈さ。生れついた躰かき、嗜めば
咽につまつて鼻へは出ず、耳で躰もかくの仕合。然るに鎌倉に残し置女共が、心ざしの
過分さ氣の働の利發さ。曾我兄弟が種替りの兄、京の小四郎といふ、物にならずの野良
者を賺し、金銀取らせ曾我の老母が方へ犬に入れて付置しが、母は血筋の恩愛に欺され、
何事も隠さず曾我が家内、箸のこけた事迄、京の小四郎が内通聞は皆女共が智謀。此上に
まだ悦び。彼老母十死一生の大病にて、死目に逢はんと兄弟を呼戻すとの内通。十郎も
五郎も孝行な奴。聞と堪らず、最早曾我へ歸りつらん。神明佛陀の守り目深き祐經、疫
病の神送つて心は武藏野爰は裾野。世間廣く今夜からどこに寐ても安樂世界」と、語る
を聞けば曾我の噂、虎少將の由縁には我も好は外ならず、耳に答へて疎ましし。列卒の中
より八幡の三郎が弟八幡の四郎、三股角の大鹿荒繩懸てひつ縛り、「せごうの兀たる盗人
鹿、惣構の柵をくぐる所を、大勢おり合生捕て候」とひつ据る。其形頭、胴躰鹿の丸皮

喉の下等―不詳
誤寫なるべし
周武王云々―武
王は文王の誤、
此話史記周紀に
あり
孔子云々―魯哀
公十四年西狩獲
麟と春秋にあり
蜜―蜜の誤、

にて身を包み、喉の下等人の面、見知りの有會我の譜代の團三郎。はつと見る目も濁江の、沼に漂よふ龜菊が、土にも入たき心地なり。祐經元より目かど強く、一周の武王は渭濱の獵に大公望といふ賢臣を生取、孔子は魯國の狩に麒麟を得られし。工藤左衛門祐經は富士の御狩に、會我兄弟が下人鬼王が弟、團三郎といふ四ツ足を生捕たるは、武王孔子に劣らぬ某。ヤイ蕃類御吟味蜜しき惣構、鹿の皮を被り、忍び入らんとせしは根ざしたる所存有よな。眞直に白狀く、偽るに於ては盜賊類になし、見苦敷刑罰に行ふべし。吐せやつ」とぞ既付る。團三郎少共臆せず、「鹿の皮を被り畜生の眞似する程の不肖の身、見苦敷刑罰を左のみ恥辱共存せず。去ながら盜賊類に落されては、浪人の主人兄弟が悪名も悲ければ、子細包ます語り申さん。祐成時宗は御狩拜見の爲、情有大名達の組下に交り、此狩場に罷有。古郷に残す一人の母老躰に俄の大病。時を待間の命の中、子共の顔を一目見て、末期の水をも受たきとの歎。夜前夜半過に會我を出、山川分たず駈付ては候へ共、慌たどしく不思議立頼付にては、惣木戸の御番所御咎を憚り、雜人の辱り捨たる鹿の皮を身に纏ひ、柵を越へんとせし所を見付られ、多勢是非なく此有様。なふお女郎 各々は情有流れの身、知る人も多かるべし。知邊も有らば兄弟に此趣きを告傳

形は人云々一祐
經をさす

へ。今はの母に親子の對面、臨終の望叶へば身の功德共成申さん。エ、團三郎が一生の奉公を仕損ぜし」と、血走つたる兩眼に、涙をはらくとぞ流しける。祐經「ムウ老母の病氣に付兄弟を呼戻すとは、此方に割符のあふ事、偽ならず。其外尋る子細有。所詮鎌倉殿御前にて吠させよ」と、ひつ立てんとする所に、五郎時宗何としてか見付けん、坂を下りに駈來り、列卒の兵五六人ひつ攔んで、手鞠のごとく打付く、團三郎が繩も皮も引ちぎり、八幡の四郎をはたと蹴倒しどうと踏へ、梢も揺ぐ大音にて、「鹿の皮被きし人を、鹿と見るは愚の眼力。曾我の五郎時宗は、形は人にて、魂の鹿をよつく見る。鹿こそ通れ。十郎殿おり合給へ」と呼はれば、祐成續いて走付、祐盛「兄弟揃ふて珍しき對面」と、太刀の柄に手を懸れば、祐經が郎黨「主を討すな餘すな」と、二重三重に懸隔ひつ包んで立騒ぐ。團三郎割て入、「ア、く、旦那龜忽なされな。今日のお命團三郎が預る。御一生の大事のお使。古郷の御老母一昨日の夕暮より、俄の御病氣次第に重り只今も計られず。千に一つも御本復有まじき御覺悟。母今生の名残、兄弟に一目對面せん、萬事を振捨立歸れ。是背かば時宗は元の如く、十郎諸共生々世々の勘當」と、絶々弱る御聲を聞捨て駈付し」と、聞よりはつと力も落、兄弟目と目を見合て、寐ぬに夢見る心地なり。團「ア、御思

さもしげー見苦しく

粉はいー粉灰

鉦一刀の鐳元を固むる金具
切羽一刀の鐳の柄と鞘とに當る金物
いはれぬー無用の差出口

案所あんじょうでなし。京の小四郎おしよせんじんの不所存人ふしよせんじんさへひつ添そぞて看病かんびやう。此人こじんにお二人ふたりリが孝行劣かうぎょうリ給たまひては、冥途めいず迄までの御恨天おんごんてんの冥加めいごも恐おそろしし。祐經すけのり殿どのに和わを乞こふてお立たちくーと勸すすむれば、祐經すけのり大きに力を得え、「是々兄弟これこれ、父ちちの河津かはづは流矢ながれやに當あたりし共ども、俣野はひのの五郎ごろうが討うたり共ども分明ぶんめいならぬ親おやの敵かたき。差當さあてて祐經すけのりを狙ねらふとな。よし／＼さもしげに云分いひわけはすまじいぞ。サア打懸うちかけよ切懸きりかけよ。音ねに聞程きこほらにもなし。怯おそれたか會我あひが殿原どのはらと、足元あしもと見たる廣言くわうげん。五郎ごろう堪たまらず「神妙しんみょう候祐經ごろうと、踊おどり出るを押止おしどめ、士し母ははの便べんを何なにと聞きく。狂亂きやうらんか弟あに」五いいや／＼／＼微塵みじん粉こなはいに成なればとて、敵かたきに聲こゑを懸かけられ、悄々せうせう立たては骸かばねの恥辱ちじよく。放はなされよ十郎じゅうろう殿どの」士しヤイ身みの譽ほまれも恥ちも捨すてし。婆ば婆ばと冥途めいずの父母ふぼを悦よろこばせ奉たごらんと、幼少おんせうより今日こんにち迄まで兄弟あにが念願ねんげん。はや忘れわすれしか時宗ときむね」五いハツアそうじや。エ、殘念ざんねん至極しごく。口惜くちをしい祐成すけなり殿どの」士し無念むねんな時宗ときむね。淺あましき會我あひがの運命うんめいや」と、涙なみだの齒はぎり身みを振ふはし、握にぎりひし／＼太刀たちの柄つか、抜ぬかけ／＼はつし／＼と鐳つはうち打うちは、鉦切羽はざきせつはも一時ひとときに碎くだけ散ちるべう見みえてけり。龜菊かめぎく手てに汗あせ握にぎりしが、禿かぶろの時ときより善惡ぜんあくの事ことに揉もれて驚おどかず。しやんと立たつて「申まをお二人ふたり様さま、顔かほを赤あかめてなんぞいの。たんと無念むねんそうに見みへるぞゑ。里通さとかよひなされし程ほどにもない。是こゝがなんの恥ちぞいの。いはれぬ差出さしでか知らね共ども、他事たごとない虎とらさん少將せうしやう様さま。龜菊かめぎくが一座いぢやに居ゐて、うつかりと見みていたかと

酒の意趣云々
酒に託して敵討
の方法を述ぶ
二日心一日酔
の氣味
得て是に云々
大抵は之に應じ
て失敗する
千疋一意馬を抑
へる
飲伏た一抑へつ
けた
朝込一早朝密に
祐經を討つ事を
仄めかせり
大寄一酒宴

八寸一四尺八寸
沛艾一蹴り上る
意にて暴馬にい
よ

思はんすも氣の毒な。お侍の義に迫るも、浮世の戀に身を碎くも、命懸るは同じ事。醫へば酒の意趣有中、二日心か公用か、酔てはならぬ首尾もある。其、足元を見て張合懸ての平強。得て是に手を取わいな。そこらを千疋繫いで、恥をかくが手柄の塞。さあ飲伏たと油断させ、心を宥す門立か。思ひ懸なき朝込、すつと仕かけ、差引成ぬ手詰の盃腕を捻上首を押へ、つぎかけく、奈落の底迄飲伏せ、引起して止めの盃一獻さいて、しやんと取。是を本望本酒の手柄といふわいな。去ながら此菊も、いつぞや山下宿で三日三夜、和田さんの大よせに、朝比奈さんの無理酒には、誓文とんといきついた」と、笑ふて其座を寛ろけしは、物に馴たるこなしなり。此詞に兄弟差詰つたる氣を開き、「母の痛はり心ならず。參會は重ねて」と立んとすれば、祐經暫く、孝行の程感じ入。祐經も一ツ家の端外の様には思はず。北海道は遠ければ、山路の近道急ぎの爲、某が祕藏の名馬狩場まで引せしを、兄弟に餞せん。外道月毛婆羅門栗毛是へく「家来「あつ」と答へて引出す。其丈八寸余り、肉十分にふし高く、沛艾に口こわく、乗人もせぬ野鬚の馬。一様の鞍皆具、遣繩追繩口取繩、つらを振ば六人の、舍人もよろめきひつ立らわ。前脚かいて齒をたよき、人を威して鼻あらし。鬘より洩ると眼の光、角なき鬼の如くなり。兄

飼—飼料

鞍そばへ—鞍に
よぎける

處命終—今はの
時、王位處命終
時不隨者（大集
經）

如意—人手の形
したる器物にて
僧家に用ふ
自救—身を護る
不動の咒文

惘れ—開きにか
く

弟急度目配し、「必定此馬に墮落させ、殺すか不具か恥かよせん 謀 辭退せば猶恥辱」と祐成會釋し、「天晴御馬候。かよる名馬を申受、浪人の我々飼も舍人も不足なれば、路次の間借用」と、外道月毛を引寄せ乘らんとするに寄つけず、鞍に縋れば鞍そばへ、前へ寄ばすつくと立、後へ廻れば跳散し、踏立蹴立高嘶き乘んづ氣色はなかりけり。「南無三寶まへに大敵後に母の臨命終。一代一度の身の大事、弓馬の氏神鶴が岡、當所には富士淺間、箱根兩所駒形權現、分身は百和龍王右鶴王左鶴王、本地大聖文殊菩薩の獅子の駒、御手の如意は鞭と成、不動明王の縛の繩、手綱に變じ給へや」と、自救の偈を繰かけ、轡の立ちよむんすと握んで、揺りと乘に恐れなく、頭を垂て身を伏し佛神力ぞ有難き。時宗嬉しく「蛇に綱付ても乗らん物」と、婆羅門栗毛の口によれば跳あがり、棹立尻込あたりを蹴立る馬煙り。つよと入て太腹をさけて退けとはつたと蹴る。左しもの悪馬もよろ／＼、ひるむ所を引寄せひらりと打乗て、兄弟 鑑 ふんばつて、轡を並べ控ゆれば、祐經案に相違して、只うつかりと大口を、惘れ果てぞ見えにける。祐成勇は時宗きはひ、土、サア／＼團三郎汝は是より秩父殿和田殿、其外の旁へ一禮申て假屋を仕廻へ。サア來い五郎」五、いざ御座れ十郎殿」と、一鞭くれて乗出すも、日脚も早き午未我身の運も

風誘云々一病母
の末頼みなき形
容

むずまれ一俄に
折れる

孫屋一字は五元
公詩書に明にし
て家貧しく冬藪
に臥す(三輔決
縁)

胸詰らしく一胸
詰らしてか

上刻と、八卦占かた八ツ響く、鐘に誘はれ、風誘ふ三重朽木の櫻春過ぎて、又いつの世の花をだに、待に甲斐なき會我の里。痛はしや母上は河津に別れしゆふべより、廿余年の物思ひ。貧しきうへに世を忍ぶ、兄弟の子の成人を、急ぐは親の老と死を、急ぐと知らで身に積る、雪折松のむすおれに、俄病の萬死の床。樂みは似ぬ孫屋が、薬屋の紙帳漏りくる風。そよと寐返り息つぎも、今を限りと聞えけり。折しも大磯の虎化粧坂の少將、狩場の留守のお見廻も、見捨がたなく留りて、さまざま心を盡せ共、名染なき身は病人の、お氣抜ひと差控へ、團三郎は富士野の使。二の宮へ人を走せても、夜明より夫婦ながら、留守と計に否應もなし。うつにも舞ふにも京の小四郎、紙帳によりては鼻いき伺ひ、小まだ歸らぬか祐成時宗。扱も遅し」と表に出ては南を見やり、足を空に蹴廻り、小是々二人の女中、我等は現在母の腹より出たれ共、五郎十郎とは種替り。殊に久敷通路もせず、漸此比來懸つて出来し顔の孝行だては兄弟衆の思はく、世間共に譯立す名染なけれど兩人は、嫁と云ふに頭振れず。年寄れても女子どし、遠慮なしに頼入。第一が臨終の勸々」と云ふに付、二女扱ははや此世の頼も切たか」と、心細さの胸詰らしく紙帳越に口差寄せ、「追付御兄弟お歸りに間もあるまじ。それ迄も先一筋に後生のことをお心に、

臨終の一念云々
―死際に念佛し
て彌陀の光明に
助けられ又十遍
念佛を唱へて諸
佛の來迎を待つ
(觀經)
攝聚―攝取の誤

お忘れなされな南無阿彌陀」と、涙に濁る聲の色。母上息も苦しげに、「去ばよ老の病の床、後世忘るよにはあらね共、臨終の一念に攝聚の光明を期し、十念の枕のうへに聖衆の來迎を待事も、此の世の念を拂ひ捨、一心亂れぬ上にこそ、本願にも逢ふべけれ。我子の絆にからまれて、暗より暗に迷ふ身は、三尊の來迎より懐しの祐成や、廿五の井より床しの時宗や。過ちでもしたるか心許なやあら遅や」と、物ごしも早弱くと、子故に惱む狩場の雉、おのが命は忘れけり。夕暮毎に兄弟を待馴しには彌増て、虎少將が氣も急れ、心も空に日は傾ふく。二玄ハアあの鳴る鐘は早七つ。なぜ遅い」と走出、表に立てば内氣遣、内には心落つかず。門の出入幾度か鐘の數々繁かりし。仇は返つて情の馬、曾我兄弟が孝の鞭、切所難所の六里半、只一時に駆させ馬を道に乗捨、つとと通れば虎少將、「そりやこそお歸り。なふ申、御病氣頼すくなく、かういふ間も危い」と、聞も悲しく胸騒ぎ。兄弟「ヤ小四郎殿深切の看病忝し」と、挨拶一禮そこくの足音靜かに、床近く紙帳のつまに手を添て、兄「祐成歸りて候」弟「時宗歸りて候」兄弟「御心は如何ぞや。など御藥は參らせぬ。北條殿より給はりし奇妙の藥是に有。我々不便と思。さば此藥召上られ、一日も御命延へてたべ母上」と、涙を隠し申ける。母「何兄弟が歸りしとや。近

取る手も云々
初春の初子の今
日の玉簪手にと
るからに搖ぐ玉
の緒(新古今集)

ふ寄れ此方寄」と、紙帳のつまより兄弟が、手首を掟と取る手ものらぐ玉の緒に、まだ力有物ごしにて、母、虎御前少將、はれぐ」と此紙帳取てたべ。早うく」との給へば、二女「あひくく」返事するまも老人は、いとど心も短き釣手、手もむすほれて、急げば廻る「あら鬱陶しや」と、押退出る母の顔、目の中儘に色合も常に變ぬ息さしに、病人よりは側の人、はつと心ぞ煩ひける。母は怒の目に涙。「ヤイ兄弟、嚴しけに北條殿の御藥何にせう。母が病とは呼返さん爲の空言。譬へば他人でも、友達知音の大病死病と聞時は、萬事を捨て駈付る是が人情、世に住習ひ珍しからず。母が末期と驚て即時に歸るを孝行とばし思ふか。嗚や外の用迎母が呼には歸るまい。殊に今度の御狩の供は、工藤左衛門祐經を討ん爲の謀反とな。五郎めは勘當宥して昨日今日。此異見は幾度か色を替、品を替て云ひ盡し、今更同じ事いふに及ぬ忘れはせじ。兄が勸たか弟が勸めたか。合點の行ぬ五郎めが頼魂、始の氣が直らぬな。當時祐經は一國の大名何百騎といふ大將。そもおことらに討れふか。一僕連るか連ぬ身を、祐經方のおふれ者、忍び討に打たる連其時誰を恨るぞ。いふも愚河津殿は坂東一の勇者、兩國かけし大名なれ共、奥野の狩の歸り足、欺し矢は詮方なく、命を失ひ給ひたる、父の最期を手本にして、昔思へば老の

おふれ者一無類
眞

身の、此比子共の狩場の留守、あられふ物か推量して、母も親の内ならば、可愛と少しは思ひやれ。母が此病といふも、偽の誠ぞや。五臓六腑の病ならで、病はなしと思ふかや。雨風の氣に當り、物の祟の病には、療治も有藥も有。子ゆへの闇の病には、唐高麗の名醫をよせ、萬卷の醫書を探しても、藥の方はよも有まじ。藥に成も二人の子、病に成も二人の子。起臥立居明暮に病と成て痛めんより、鳩毒と成て一思ひに殺してしまへ兄弟」と、かつぱと臥て泣給へば、祐成時宗虎少將、「こは勿躰なき御詞」と、疊に頭を打付て沈入たる連涙。無智無慙の小四郎が義理にも泣ぞ道理成。祐成袖を絞り兼、「御教訓と申、御不便餘つての御恨。暫しが中御心を苦しめし段後悔恐入候。敵を討て命を捨るも父の孝養。母を悦せ申さんため御機嫌損ひ命を捨て益もなし。祐成に於ては敵討のこと、ふつよと思ひ切たるが、五郎いかに」と有ければ、不請々に佛頂頰。五ハテ生る共死ぬる共一所と云ひ交した兄きの分別、變るからは獨物にも狂はれまひ。どう成と勝手次第お返事なされ」と、尖り聲。母あれくあれこそ母が病の神。元の如く勘當との給へば、虎少將、「エ、悪い聲付。同じ物の云ひ様で、あゝ畏たといなんどりと、お受は成ぬことかは」と、諫めても猶頼癖。祐成大聲上、「母上のお命の障り御勘當に懲ぬか」

なんどりと
となしう

金打―武士の誓約する時刀の刃或は鋸などを打合せて誓ふ式

慶時云々―禮記内則篇にある語

悦ぶ―顰布にか

かみ様―母様

と、呵しかられて恟びつりし、「口でまだく申さんより、誓文せいもんのため只今御前おんまへで金うたふ」詰チ、尤尤。いざ金打きんうちやうと兄弟刀拔なきくつ寛ろけ、打合うちあんとせし所を、母手に縋すがり押し止おしどめ、「チ、出来でかしたりく。生先祝おひさきはふ若者共金打きんちやうはせぬ事ぞ。其眞實そのしんじつを見るからは最早心もはやも落付おちつたり。嬉うれしし嬉うれしし。今こそ母が藥と成し二人の子、元服げんぷくさせて此方の痞つかへが下おりた」と悦よろこびの、笑わらひ顔さへ哀あはれなり。母「惣じて若わかき男子そのこに、妻子つまこと云ふ羈はだしを早く持もつせねば、身持みもちを輕かろく命いのちを塵共ちりども思おもはぬ物。虎御前こらおんまへや少將せうしやうとは深ふかき契約けいやく有ありこそせめ、押出おしだして自みづからが嫁よめと呼よねば定ままらず。嫁時めとはかならずし、必かならず父母ふぼに申まんと禮記らいきとかやにも有ありと聞きく。今夜こんや是こゝにて祝言しゆげんの盃さか、取とり祝しふてたべ」と、枕まくらの文ぶん匣こに疊たみ置おく直垂ひたれふたくだり二領ふた。「是こゝは兄弟あにが爰こゝはの晴はれと嗜たじなむ。一世いっせい一度いちどの妹いも脊せ結むす、二人ふたりの嫁御よめご、衣紋えもん風ふうよく著あせ給たまへ。狭せまく共ともあの部屋へやを嫁入よめい御殿ごてんになぞらへ、肴さかなは悦よろこぶ打鮑うちあはひ。折をりも二の宮みやの姉あねがくれたる小櫛こくしをも、心こゝろで結むすぶ蝶花形てふはながた。母ははは持佛ぢぶつの前に寐ねて、河津殿かづのの位牌ゐはい諸しよ共どもに、ざとんざの聲こゑ聞きせてたも。ヤア京きやうの小四郎せうしやうおのれは方々はうはう寄方よかた多おほし、今夜こんやは歸かつて重かさねて來こい。あれ日も暮くれかよる。里さとの迎むかひも來こさき、兄役あにやくに祐成すけなり夫婦ふうふ部屋へやへく」と詰「あつ」と云へ共立兼ともたかて、恥はぢて赤あからむ横顔よこがほを差込さしこむ虎こらが袖そでの下した、虎こら是こゝはく大人氣おとなげない。かみ様のお世話せわに成事なりごとか。手管てくだの逢あふ夜思よめひ出いし。手てばしかふ遣やらんせ」と、手てを取交とりかし入いふりを、

あつし和郎一面の皮の厚い男

燈じき一六ツ時にかく

甘宮一漢武帝李夫人の契に喩へたるなるべし、甘宮は甘泉宮の畧か又は漢宮の畧寫歟

五郎見やつて「扱も兄きあつし和郎。こちや成ぬウ、恥かし」と、俯向て疊に喰付身を縮む。是申少將が若ふて、殿御の思ひ様、嫂に劣つたと姑御の思召も迷惑。サアござんせ」と引立つれば、吾否こちや否じや」少「否と云ふてすむ物か」五「それでも母じや人の見てじや物」少「あれ彼方向しやんした」五「否じや」少「も否ならぬ」圍に引摺入相の、鐘睦じき夕べなり。月なき宵の雨曇り、京の小四郎部屋を伺へば、今宵計はたつぷりと、燈心太き燈火の、影に廻らす盃に。可笑や何を目的にて、八千代を結ぶ夫婦の縁、親子の縁の縫合、からむ岩根のさざれ松、「濱松の音はざんざ千箱の玉」とぞ語りける。小四郎が思ふ壺「甘しく。假令兄弟鬼神でも、母と女房に斯う頼打れては、脚骨立ずの腰拔。祐經公一代の厄拂ひ。此足で注進し御褒美は何で有ふ。知行で有らふか。若金銀を下されたら小商まだるひ、とんと小判にかよらふ。小判く」と獨言、口に金の舌を管てぞ出にける。揚屋の空燻山里に、けふは蚊遣に燻替、二つ竝べし羅ものの、蚊やも紙帳と所帯めく、内は裏なき浮世塵、心を延る種ならし。甘宮の床の上に契りを千年の鶴に譬へ、恩愛の筵の上には快潤たる母の詞、恐れざるにはあらね共、時宗が年月の念力、やはか今宵を過さんと、少將を酔臥せ、出る紙帳の戦ぎにも、祐成の目や醒

んと心締たる高からげ、母の形見と直垂かい込、身を潛めたる差足は、我身ながらも野狐の鼠を窺ふ有様なり。云ひ合せねど同じ心に祐成が、虎を酒に寐いらせて、今生に有てこそ母の恨も有べけれ、今宵限りの命ぞと直垂身に添、拔足に燈し火暗き人影を、弟は兄共知らず、兄は又弟共、知らで互に忍び足、ちらと見付てつよと寄り、「時宗か」五「十郎殿か」土「音高しく」。彼の一大事を今宵と思ひ定しな」五「我とても其通。よつく兄弟が心の斯く迄合ふ事は、本望遂んは手の内なり」土「兎につけ角につけ痛しきは母上。悦び寐入の御枕嬉しき夢がな見給ふらん」五「醒ての後の御歎、今見る様に悲しや」と、奥を見遣て兄弟が忍び涙で哀成。祐成涙を止め、「豫ては今宵假屋にて、心靜かに書置し、形見も残さんと思ひしが、是より宙を断る共、富士野へ著ば夜半も過、なか／＼思ふ外成べし。歎きの中の御慰、一筆残さん」五「尤」と、床の硯を引寄せて、料紙取間も有らば社、恨みなとてぞ書つくる。紙帳に涙拭へとや乳房唾し昔より、廿余年の身の思ひ。悲しさも嬉しさも書綴りゆく藻汐草、心餘れど盡されぬ。祐成はともすれば、虎が情の忍びがき。時宗が筆の運びには、箱根の別當の御事、母の御不興宥され申、俱不戴天の敵を討名を後代に上ん事、偏へに母の御慈悲とぞ。其外同じすすさみにて、今日賜はる直垂は、最

藻汐草—書き集
めると云より文
章に用ふ
箱根の別當—時
宗幼時世話にな
りし人

波—無にかけ
の如き皺

期に著し冥途迄、母上に添ふ心地にて、父尊靈に逢ひ奉らん有難さよ。脱捨し著ならし衣、形見と御覽下さるべし。弓と鞆は二の宮殿、机に残せし萬葉集法華經は、時宗が八年讀誦し手に觸し。姉御前に參らする。守袋は禪師坊、諸神諸佛の誓を直に、後世の引導頼むぞや。鬢の髪は虎少將、千筋となでし數々の、念佛巾手枕の、移り香しめて忘るなよ。鞍と鎧は鬼王團三郎にとらするなり。我々が身に替り母上の宮仕へ、頼むことは是一つ。建久四年五月間、天は暗しと申せ共、思ひは晴るよ下旬八日。祐成判時宗判と書止め、からりくと筆を捨、聲をも立ず泣居たり。「名残はいつか盡すべき。短夜や更ぬらん。いざこい五郎」と先だてば、續いて出る時宗が、大力の踏足に、年經る家の落椽を、がはと踏抜どうと落る其鬢、障子の煽さはくくく。紙帳の騒ぎに目を醒し、馬ヤア十郎様がおはせぬぞ。少五郎様もござらぬぞ。表よ。奥よ。と立騒ぐ。其見付られては悪かりなん。五やり過して跡より拔ん」と領き合、荒たる庭の秋薄引被いてぞ隠れ居る。「なふ此帳の書置扱は今宵討死とや。たつた今結びの盃して、直に離れてあられふか。かみ様のお歎お腹立。追付て留て見て、つまりは共に死ぬる分」と、帯引締裾短、襦かいかからけ走出んとする所に、奥より母上箒追取捨も波の皺腕も、共に折よと打立く、母ヤ

里一廊

夜るの蟬一壁立
ぬ意襟につく一勢に
つく

レ思切の無い奴」とて、はたと打、「未練者」とて丁と打。「里にては流れの身、爰にては武士の妻。夫の親の敵討、母が目顔を忍んでも、共に見たて出してこそ弓取の女房なれ」と、打敵きく、「母は寐ても寐いらす、書置するを物合より、見て泣涙はいか計。そこを堪へた親心思ひやれや」と計にて、箒をからりと投捨て、轉び臥て泣給へば、垣越に聞兄弟、「宵には似ざる御心。又もや御意の變るか」と、立も離ぬ夜るの蟬、取付露の崩垣、忍び音になく哀さよ。二人の女かきくれて、「敵討ツを曲事と御呵りの間もなく、止むる我等をお咎は、狼狽て猶氣が迷ふ。合點の上で諸共に思ひ切なら切たい」と、恨顔にて口説泣く。母君いと目も開れず、口は廻らず心は急。母「子細も云はず杖棒當て恥しい。昔を知らぬ人々の不審なも道理。兄弟の子共が五つや三つの比より、父を討せ無念なと思ひ込ふだる魂、成人に随ひ増りこそすれ翻へさぬ、弓矢取る身の念力、母が止て留らふか。夫知ながら可愛そに、死目に逢ふと驚かせ惑はせ、邪魔を入て呼戻し、其邪魔は誰がさすぞ。恨めしや妾が腹かした、京の小四郎といふ種替りの大悪人、慾に耽り襟に付敵祐經が家の子同然に身を寄せ、此比爰へ入來り、有事無事犬に成て嗅出し内通すれば用心し討べき透間もなきと聞、病と偽り呼戻し、慘ふ憂ふ呵りしは、悪人の兄めに聞せん

ねび者一年より
も大人びたるも
氣がき一勝氣の
性質

妻—夫の事

ため。彼奴めに聞するは祐經に聞せ油断させて、やすくと討せん爲の親の慈悲。心碎くはいか計。一万と云ひし時よりも、兄十郎はねび者にて麁忽せぬ生れ付。箱王の時より五郎は氣がさ者、すはと云へば氣がはやる。腕の骨のかたまる迄、人にも油断させんため、出家にすると箱根へ登し置たるに、元服したる咎ぞ逆、此比迄の勘當は、是も敵に肌許させ本望を遂させん、と勘當も親の慈悲。父の爲に捨る命、惜まぬ子には孝の道有義もあり、討死すると知りつゝも勧める母は何の道。恨めしの身の上や。助かれといふ情はあれど、死ねといふ慈悲はなし。親の死を歎かぬ不孝の子は多けれど、孝行の子の討死を厭はぬ母は我計。若き子共を先立跡にさがる冥途の道、妻の河津殿へいひ譯は何とせん」と、涙の限り聲限り、口説給へば虎少將も絶入計。母の愛心兄弟が身に答へ胸に染、悲さ詮方遣方なく、伏拜ては泣沈み、歎き入ては伏拜み、思ひ隔つる破垣、いと涙に朽ぬべし。母、不便や可愛や兄弟が、由なき母に絡れ、嗚や道を急ぐらめ。去ながら現世の望叶ひなば、來世はなを頼み有。箱王を出家にせんと袈裟衣迄營みて、佛に契約申たる其言葉を違へじ、とかはりに母が出家して、その袈裟衣身をはなさず。是見よや嫁達と、上の單を脱かくれば、下は黒染五條袈裟。一度に「あつ」と手を合す。庭と上とに四人の願ひ、

四弘誓願一佛の衆生をして佛度解脱安心涅槃を得しむる誓願返つて一却てをしか一惜しと牡鹿

鹿の身の果一筆は鹿毛にて作るを良しとす

替へまほしーかへたいと星とかく

四弘誓願ぞ有難き。子を先立ての弔ひは、逆さま事とて其子に罰の當るとや。身は箱王が替りにて今日より我こそ箱王法師。十郎は我兄五郎は返つて我が親ぞや。いざ虎御前少將、初夜の勤の比なれば、親五郎殿兄十郎殿の菩提を祈らん持佛へ」と、泣々誘なふ御姿、兄弟此世の暇乞、名残をしかの狩場へと、急ぐ足さへ跡へ引。立留まりても面かけを、中に隔つる小萩垣、物越もはや聞せじと、耳驚かす初夜の鐘、諸行無常を今迄は、餘所に聞しも我身の上。母は我子の上に聞、一ツ響きを別路の、涙々に聞分けて、又逢ふ夜なき親と子の、袖の露こそ重たけれ。

第四 たら少將道行

妻戀ふ鹿の身の果も、戀の文書く筆と成ル。有て甲斐なき老の身は、死て躰の置所、同じ裾野と心ざし、馬に任する道知るべ、是は若駒乗手は老の、姑獨嫁二人、踏も習はぬ双鏡、流石夜道の力とや、油煙も細き提灯に、足元計照らさせて、しほれ出るぞ哀成。先はいづくと詠むれど、富士さへ見へぬ闇の夜の、今宵一夜は十五夜の、月にぞ替まほしの影、ちらくちらく螢火か。いや兄弟の亡魂よ、結び止んと下がへの、凄吹かへす

雲より上―郭公
を云

三保―見ゆるに
かく
聞はあやなし―
古今集の春の夜
の聞はあやなし
云々の歌をとれ
白月毛―知らう
にかく

浮別れ―憂き別
れ

夜嵐に、ぱつと消へては狐火の、我とわが身を迷はする。雲より上の一聲や、又二聲三
聲とだにも啼捨て、いづち行らんやよや待。汝よ其途の鳥ならば、死出の山路に關据て、
先立つ我子留よかし。心覺への道程も、ゆん手は秩父の山おろし。松の響か磯打波か、晝
なら三保か 相山 清見寺、鐘かうくとはの聞え、猶も心ぞ急がるよ、きらめく露の玉澤
村 聞はあやなし梅澤村、ふた村過て行狂ふ、駒の蹴上の鞍子川、衣紋流しのア、曲も
なや。此駒の道の街に行泥み、打て共あをれ共、など進まぬぞ歩まぬぞ。哀一足に千里
もがなと、こがるよとは思ひ知らぬか白月毛の、駒に恨の涙の鞭、打に甲斐こそなかり
けれ。いやなふ駒に科はなし。此別れこそ大磯道。夕暮ごとにお二人が、しやんとめさ
れて通路の、戀の知邊の馴々し。今宵はそれに引替り、乗手も道も替るとは、知で止ま
る可愛さよ。御兄弟の御形見今一度里の方へと押向て、引立見れば不思議やな。元の如
くに歩み行。引戻せば立止り、慕ふは誰そ我夫、我子よ主の浮別れ、共に悲しむ優やと、
鞍の前輪に縄付、歎ば共に聞入て、耳をふせ尾を垂て、人諸共に泣涙、おのが毛色も染
ぬべし。歎な駒にせい付て、ハイシイ足柄越は風荒く、露を蒔繪の箱根山、今行道もつ
いに行、賽の河原のいつとても、大人童の隔なく、歌罪は重たし迷は深し、何か菩提の

續梅一箇ぎ木
した梅

杓一食ひにかく

わくせき一せは
しい、國威の字
音

道と成。懺悔くく懺悔。何か菩提の道と成。さんけくくく「ゑ」色にそみ又
香に愛て、拾ひ洩せる後世の種、闇の闇路を如何にせん。照せ三島の宮所、御燈の光し
んしんと、心も清き瑞籬に、馬上の母は手を合、祈る願ひの百千々を、いはで心に駒急
ぐ。老木の松はつれなくて、初咲櫻續穂梅、盛りの花の嫁達の、身にはいか成神無月、五
月の雨の何の間に、涙の時雨染手綱、絞れど乾く隙ぞなき。出行人に後じと、笠取敢ず杖
取らず 常の姿を其儘に 今来て見れば旅衣、裾野も近成にけり。星さへ見せぬ松林、
下は野澤のちりく水、裾は茨が綻ばし、足は草履が杓やきりかぶ小石原、一寸先は暗
のうたてや小提灯、細蠟燭もほの闇く、駒の躓き氣遣し。御狩場も早程近し。是から二
人がお手を引、「いざ徐々お歩」と、抱きおろすもおろさるもよろめきながら下り立て、
母なふ嫁達乗てさへ草臥る 我身で思ひ遣るよ。もう何時ぞ。心のわくせきする故か、
鐘は四つやら夜半やら、聞捨てて數へもせず、更た様に覺ゆるに、狩場の方に物音は聞え
ずや。兄弟が生死も誰か聞せん便なや」と、歩もやらす立給ふ。ニ玄お道理や去ながら、
我々が妹分木瀬川の龜菊と申者、祐經が氣に入て狩場へも呼れしゆへ、御兄弟の御事を
身に引締て頼しが、若けれ共龜菊は、侍まさりの氣性といひ、義理強ひは傾城の習ひ、

如才云々―愚は
あるまい

哀かし―嗚呼

石だたみ云々―
紋所の名
しげれ云々―太
夫の客と睡じく
語る

三本傘、雪折竹
―紋所
むのじ―無念な
どの畧婦
さし合くらす―
間を悪がらす―

よもや如才は致まじ。哀かし龜菊に逢ひたひ事や」といふ中に、草の葉越に散つく火影、
あたりを照して見へければ、二女そりやこそ事よア、氣遣。一走往て見て來うか。跡も
危なしあれ」と、心計を碎く間に、次第に近付提灯に、女交の笑ひ聲、「エ、氣遣ない
皆廓の駕昇共。假屋へ呼ばれた女郎衆の戻りと見た。若あの中に龜菊のいやる
か、いざ待合せて問ふて見よ。母君は先暫し」と、草の繁に隠し置、小挑灯の心切しめし、
待共知らでざよめきて、一節謠ふ聲のあや。歌 三年以前の皐月閣、鳴立澤の歸るさに、
禿ごさんか誰やらが、螢を取て遊びなば、面白かるでは有まいかと、ウタイ醉を涼めし夜
半の風、今の氣色に吹送る。駕昇が癖は駕でふり、螢は光淺瀬川。甲「跨けじや」乙「まつか
せ」乗物の、乗手は知れた挑灯に、上と下とは石だたみ、中に二重の松川菱、木瀬川の
三浦とて年まへの太夫、大彌大殿とは深い中。これも狩場へ呼寄せられ、しけれ松山浦山
しい。二女、跡から見ゆるは誰ぞいの「問れて駕の簾より、招く扇や開き扇は虎、朝霧様、狩
場の露でしつほりと、濡れさんしたの」。ぬれた印の三本傘、雪折竹は奥州様「少」五
十余人の松の中、手管の上手め見たぞ遣ぬぞ」朝「チ、いや悪口云ふは誰ぞいの」虎「問れ
て云ふはむのじながら虎でござんす」少「少將じや」朝「珍らしい問ふに及ぬさし合くらす

いたら貝、綱の手舞鶴、龜甲、大一云々皆紋所の名
 竹に雀一仙臺候の紋所
 幸菱梅鉢一之も紋所

嵐—あらしにか

ハッ頭—ハッの上刻

中よしの兄弟御の假屋へか。龜菊様共一座して、御噂たらぐ。近い内逢ふぞゑ。先おさらば」と、道を早めてそれそこへ、いたら貝は岩崎様、網の手は菅原殿、舞たる鶴は茨木やの左門殿、龜甲は輪違やの花咲か、一座の座配、逢ふ夜のわけ、大一大万大吉と、我を折烏帽子立烏帽子、白一文字黒一文字屋の山の井殿、竹に雀は仙臺屋の陸奥殿、遣手は露の幸い菱、醒る眠りの梅ばつちり。竝んで二つ挑灯は大和屋の唐土、名も高橋の紋所。二人が心相籠で、追々に昇來る。急るよ心に虎少將、詞を掛ねば答もなく、過行跡から龜菊が、印は紛ひも嵐吹、紅葉流しの紋挑灯。二女コレ龜菊殿、虎少將じや物問ふ。乗物暫し」と止むれば、龜待てたも駕の衆」と忙し中をせはし夏草、わくせき草にぞおろしける。龜なふ逢ひたかつた二人様」二女此方とても其の通。して御兄弟のお身の上はどうぞいの」龜去ばいな。云ふてもく御運の弱ひ御兄弟。御袋様の御病氣とて、俄に會我へお歸り。京の小四郎とやらが内通、何やかやで祐經とんと心を許しもう樂じや。今宵から假屋に足を伸して、御狩中は緩りと酒盛しよとの前巧。是はよい首尾御逗留の間には、どこぞで本望遂げさせましょ、と心力の有し所、けふ晝過ハッがしら鎌倉より、二の宮の太郎殿と云ふ人早打のお使。頼朝様の弟蒲殿とやらが、腹切んしたといの。是も

やくたらーたわ
いもなる

白兔一仕合を得
る

わりはまー始の
轉じて顛倒する
事用捨箱
命長き云々一富
則多事、壽則
多辱(莊子)

御兄弟に付て入譯有てじやけな。それで假屋くの騒動、踊の崩じやと思はんせ。それゆへ頼朝様も、今宵八ツにお立鎌倉へお歸り。若し雨が三粒でも降ば、明日五ツにお立が延る筈。降ても照てもお先手は八ツ立とのお觸。荷を締るやら何やらやくたいの有ることか。私らが様に假屋くへ呼ばれた女郎衆、俄に里へ戻さるよ。此有様見て下さんせ。抱へる様に思ふても、御運の悪い御兄弟。お知人に成ね共お袋様もおいとしい。こなさん達お二人の心が察し遣れて、私や涙がこぼれる。去ながら悔々と思はんすな。來らぬ時節は是非がない。私も運が悪いは。まあ二三日狩場に居れば、白兔の子囃ふ物。何も時節と思はんせ。もう別れんす其中と、大事の咄ひつ摘み、しどけ半に云ひさして、駕を早めて急ぎ行く。母君堪兼轉び出、「龜菊とやらの咄聞ました。チ、和女衆も悲しい筈。母が心も推量あれ。いふ事なす事ぐりはまに成、曾我の運存へて幾何の憂目をか重ね見ん。命ながきは恥多し。嫁御去ば」と守り刀を逆手に抜き持、「南無阿彌陀南無阿彌陀佛」と稱名の、聲より早く飛懸りもぎ放し、二女胴慾な御袋様、命を捨てよ御兄弟のお爲に成事ならば、二人が命惜まふか。望さへ叶はぬに、母御に自害させまし、不孝の罪は子に報ひ、一生御運は開けまい。御兄弟がいとしくば思ひ直して給はれ」と、

浮事—靈事

縋り歎けばわつと泣、母死で浮事聞まいとは、子を思はぬに似たれ共、母が身にも成て見や。子共の爲にと病を作り、思ひ設けし母が慈悲は仇と成、雨さへ降らねばお立は今宵八ツ立とや。顔振間も有ることか。一假屋くの騒しきに、若近寄て見咎られ、盜賊成と搦られ、返つて浮目にあおふかと案ずる程身も慄はれ、自害せず共死兼まい。頼朝公の鎌倉入を止むるは雨計。アレく星も晃々と、雲の一筋あらばこそ。何故雨が降物ぞ。

浮目にあおふ—
浮目に逢はう
空目—見ぬ擬

降らずば望は叶ふまい。五月雨は五月の雨、一ト日過れば六月よ。今宵は二十八日の、五月の雨はなど降らぬ。月日に僞りましますか、と勿躰なや天道迄恨申も此母が、命の情ない故ぞかし。空目して死なせてたも。刃物たもれ」と縋付、其手を直に抱付、三人一所に顔見合せ。思はずわつと聲を上、悶へ焦れて歎きしが、虜少將様何と思召す。雨さへ降ば明日五ツの御立とや。其間には御兄弟御本望は必定。お二人の名を下すも、名を上げるも雨一つ。夫を慕ひ石に成たる女も有。身社賤しき流れの女と成たれ共、一念は誰に劣るふぞ。天道地神龍神も、流れの女は守るまじとの誓もなし。命にかへて天道へ雨を祈る心ざし、そなたはなんと「少ヲ、我とても其通。死ぬるに二つの道はない。サアく早ふ」と勇み進めば母君も、「頼もしき心ざし思ひ込ふだる念力、天

夫を慕ひ—望夫
石の故事

苗代水云々―能
因三島の神に雨
祈して「天の河
苗代水に云々の
歌を詠上しに雨
降りし」と云ふ
〔古今著聞集〕
小野小町―理や
日の本なれば照
もしつさりとは
は又天が下とは
の歌

道納受なからんや。我も共に」と立ち給へば、虎御前中に立、心の疑ひ夏草を結んで幣と禮拜し、眼を閉き心中に、「南無や三島の大明神、傳へ聞古會部の能因法師、苗代水にせき下せ。天くだります神ならば神と、詠ぜし歌は國土のため。日の本照す日の御神も、雨寶童子の御名は普き天の下、咎めて陳ねし大和歌、例も降り雨乞の、小野の小町も女なり。我も又女なり。三十一字は陳ねず共、妾が偽り無き心、百首千首の和歌と成て、感應の雨を降りし、願ひを叶へおはしませ。日比信じ奉る普門品の天龍八部、阿修羅、迦樓羅緊那羅摩喉羅、其外南海下界の龍神、二人の願女が一身の血を絞つて雨となし、夫の大望母の歎を止め給へ。慈悲妙大雲、澍甘露法雨、怖畏軍陣中、念彼觀音力」と、虎少將が小指を喰裂き、流るゝ涙諸共に、袖に浸して虚空に散らし、一身五躰に汗を流し、足をつまだて肝膽碎き、天を禮し地を拜し祈る心ぞ無残なる。諸天も感應過たず、晴天たちまろこやみ、常闇と虚空に閃く電光、足鷹山に雲覆ひ、涙の雨を誘ひ來て、俄に降くる雨の足篠を亂すが如くなり。人々嬉しさ有難さ。濡るも厭はず伏し拜みく、御本望の未頼もしく、袂を母に打覆ひ、狩場の方へ焦れ行く。されば五月二十八日に、今の世迄も降雨を、虎が涙や少將の、夜るの雨共三重名に高き、富士の裾野の御狩の御遊。鎌倉の騷動にて、

怪れし一精にか

細察一頼朝公

借一貸

急ぎ歸御有るべしとの、時刻も雨に事延びて、假屋の騒もいつしかに、辻の籬も影薄く、晝の疲の手枕に、短き夜半の鐘の聲、夢より夢を結びける。時節よしと曾我殿原、鬼王兄弟を古郷へ返し、出立祐成が裝束は、母上より給はりし、秋の野に草盡縫ふたる、練貫の單ぎぬ、村千鳥の直垂の、袖を結んで肩にかけ、黒鞆まきの太刀を佩き、竹子笠の紐強く、上に下部の青合羽、陣明松に道照らさせ、先に進めば五郎時宗、是も母より給はつたる、白綾に鶴の丸縫ふたる袷衣、揚羽の蝶の直垂、赤木の柄の腰ざし、別當より給はつたる、源氏重代友切丸肩に打ちかけ紙合羽、しめたる笠の怯れじと、跡に續いて出立たり。驚いかに時宗母の御恩を徒に、今宵敵を討ずんば、不孝といひ世の人口、生たる甲斐も有まじきに、天の恵か降雨に、御寮の御立は延引す。狩場の用意も事靜まる。殊には蒲の入道殿、借給はつたる此割符、頼朝公の膝本へも通路自由と閉なれば、祐經を討は案の内。假屋には定て遊女數多有べきぞ。罪作に手な負はせそ。雨はいつも降ながら、今宵の雨ぞ身には染む。討死せしと聞えなば、思ひ切たる御心にも、母の歎はいか計。悲さよ」と涙ぐむ。時「仰にや及べき。祐經は籠中の烏網代の魚、やはか洩し候べき。恐らくは此時宗、天魔破旬に出合ふ共、ちつ共怯まぬ魂。今宵の雨は身に掛り、ぞ

飛—仙人の飲む
甘汁

あだゆみ—あは
登語 止む事
星々—さつばり

所領云々—領地
没收の事

つこん通つてわぢくと、物悲う罷成。敵に出合ひ働かば、所々の死を遂げんも計られず。最期の盃、一つ飲ふで給はれ」と、腰に付たる懸烏帽子に、降くる雨を受溜めて、祐成が手に渡せば、驚なふ七度結びて兄と成、六度契りて弟と成と傳へ聞。死替り生替り、兄弟の縁は切まじ」と、さらりと干してさしければ、時宗とつて押戴き、「兄は親にて候へば、母うへの御盃も是に籠り、天の甘露仙家の漿此酒に勝らんや」と、受ては飲みく、降くる雨は恩愛の、親と妻との血の涙、親子夫婦の血を飲と、思ひ知らぬぞ哀成。五月雨の一頻おだゆみて、空さりけなく星々と、北斗の光鮮に、晴れ渡れば、安西の彌七郎、新開の荒四郎、旅装束に下部を引具し、「雨も晴て候ぞ。君は明日五ツの御發駕、先手は追付お立の御用意」と、呼はらせ打て通る。兄弟「はつ」と顔見合、「此騷に亂入、討て本望達せん」と、袖摺違へ斷通る。安「コリヤくく」何奴なれば御假屋の傍近く、斷もなく忍び行。馬盗人が盜賊か。それ搦よ」とひしめけば、祐成騷がす「イヤ苦からず、鎌倉より祐經殿へ密々の御用の使、咎立して旁が、所領の仇ばしし給ふな。疑はしくは見られよ」と、首に掛けたる通路の割符、「是見られよ」と指出す。兩人恸り詞を替へ、「存せぬ事とて雑言申せし御免有。新開安西咎めたりとは、祐經殿へは必沙汰なしに

波に揺らるる云
云一曾我の爲唯
一の案内者は我
なりと也

頼入。假屋へは此辻を左へきれ、行當りの大構。いざ御通り候へ」と馬鹿慇懃の空輕薄。結句敵の引入を、仕濟顔にぞ別れける。兄弟遁るゝ鰐の口、虎の威を借る此割符、蒲殿の御恩ぞ、と御寮の假屋の傍近く、忍び入こそ危けれ。左右の假屋騒立、「お先手は發足の御觸有。合羽は取置腰錢を取落すな、馬よ鞍よ」と犇けば、兄弟彌氣も急かれ、「祐經が假屋とてもさぞあらん。是迄忍びし甲斐もなく、此雨の降止む事、神明にも見放され、能く武運に盡きしか」と、拳を握り齒を鳴らし、虚空を白眼んで立たる所に、秩父の執權本多の次郎近經、小具足に身をかため、本陣の夜廻してけるが、曾我殿原と見るよりも、近々と歩みくる。兄弟「誰ぞ」と咎むれば、本波に揺らるゝ沖津船、知邊の磯は此方ぞ」と、呷く聲に祐成「はつ」と嬉しく、「重忠公の御情、又は御身の御懇情、此度に限らね共、御禮申事もなく、禮義知らずとや思されん。今宵年來の大望達せんと存る所、俄に雨晴れ假屋くは出足の用意。此騒には覺束なし。此儘歸つていつの時をか期すべし。無二無三に切込で、兄弟屍を晒す所存。重忠公へ一生積る御禮は、貴殿の執成頼み入ル」といひければ、兄弟が耳に口を寄せ、本氣遣ばしし給ふな。祐經は明日君の御馬の御供、それ故假屋も寐靜まる。こなたへく。靜に」と、道の案内の杖柱、嬉しさ類

はなかりけり。本「是こそ祐經が臥床なり。心靜に本意を遂け、會稽の恥を雪がれよ」と、最念比の詞に縋り、「御案内の程五百生の躰を焼く共、いかでか報じ盡すべき。随つて通路の此割符、蒲の入道殿より密に拜借申せしかど、御切腹の跡なれば、返弁申さん様もなし。我々が死骸にあれば、蒲殿こそ御勘氣の、伊藤が末の會我に組し、反逆の族よと、死後の虚名に御骸を漬さん事、御恩を却つて仇にて報ずる道理、近經殿に預け置然るべく頼み存ずる」と二枚の小札を手に渡せば、本「尤々近經に任されよ。主人重忠悪くは計らひ申されまじ。老母の事もゆめく、龜略候まじ。今暫くと存つれ共、役目なれば知らぬ顔。弓矢の禮義是迄」と、本多は假屋に入にけり。「今は何をか期すべき」と、兄弟合羽かなぐり捨て、「本多が教し敵の假屋は是なり」と、木戸駒寄を飛越へ跳越へ、兄弟につこと打笑ひ、天にも上る心地にて、難なく臥床に討て入、次に伏たる宿直の侍、足音に目を覺まし、「すは盗人よ」と呼はつて逃出る。假屋／＼に聞付て、「ツリヤ盗人よ御立よ」と、騒ぎの上に又混亂。相圖響かす大鼓鉦、かん／＼どん／＼どん／＼。又雨が延て來た。お立が降」と入も有、雨の足音さつさつさ、人の足音どろ／＼。右往左往に三置もてかへす。其際に兄弟は、敵工藤祐經を思ひの儘に討おほせ、門外に走出、袂

歩―綾板

不退の彼岸―極樂

奉公日の出―日の出の勢ある侍共と刃を試す

を絞つて喉を濕し、勢ひ猛に立たりし、心の内こそ嬉しけれ。鯨エ、心地よい時宗。年月の思ひに較ぶれば敵を討は易かりしな。余り嬉しさ心急いで忘れしが、祐經に止刺しつるか」と問ければ、時「あれ程に切上は、何の子細か候べき」鯨いや然はなし。跡にて實檢有らん時、敵を討は討たれ共、止を刺さぬは狼狽たりと云はれんは、駭の上の恥辱ぞかし。五郎如何に」と有ければ、時「尤」と打頷き、誰をか恐れ忍ぶべき。のつさく假屋の歩、ぐはつたく踏鳴らして引返し、障子襖はらくと蹴放し、祐經が死骸にどうと跨り、鯨能く聞け祐經。一念の嗔恚に依つて敵と成味方と成。六根の罪障消滅し不退の彼岸に到れよ」と、腰の指添ひん抜き、時「そも此刀は箱根にて、初て見參したる時、得させたる赤木の小刀。御邊元の主なれば、鐵の味は知つらん。只今返す受取れ」と右手の耳の下よりも、ゆん手へ通れと刺す程に、耳と口とを「一蓮托生、南無阿彌陀佛」と回向して、元の所へ立歸るに手指す者さへなかりけり。祐成待受、「落ば此儘落べけれ共、隠れ忍んで一生を暮さんは生たる甲斐は有まじ。一足にても逃」とは弓矢の恥辱。殊更我々ゆへに御生害有蒲殿の御恩、御供申さで叶はぬ命。浪人の我々が鎗太刀と、奉公日の出の殿ばらが、刃を試して討死せん」時「尤」と、二人等々大音上、「伊豆の國の住人

伊藤の次郎祐近が孫、河津の三郎が二人の子、曾我の十郎祐成同じく五郎時宗、親の敵工藤左衛門祐經を討留めたり。頼朝公の御内に弓取はなきか。折合て打留めよ」と呼ばはつて、邊を睨んで控へたり。闇さは暗し雨は降る、假屋くゝに、「すは夜討」と、弓一挺太刀一振に、五人三人取ついで「我よ人よ」と奪ひあひ、繫馬に鞭打て、遅しとあせら所も有、鎧に迂り兜に躓き、小手を臙當草鞋を笠、上を下へと舁けば、御馬屋の徳竹大聲上、「物のあいろも見へざるに、松明出せ」と呼ばれば、二千軒の假屋より箆鞞箆竹笠、傘箆に至迄、火を付て投出せば、裾野の暗は忽に、百千の朝日影、一度に照す如くなり。騒の中より名乗掛けく、切つて出れば兄弟は、小柴垣を小楯に取、入替く名乗替へ、火花を散らして雨交り、揉立く、三重戦ひける。腕首切られて引も有、頬先肩先尻こぶた、弓手の太股馬手の足首、矢場に切られて死するも有。され共兄弟薄手も負はず、血氣に進む時宗は、假屋の人種絶やさんと、御所の間近く切て入、祐成は柴垣の影に息をぞ休ける。假屋くゝの松明も降くる雨に打消され、東西暗き小陰より、緋威の鎧著て、二尺余りの打刀、三尺五寸の大刀横たへ、四十足らずの武者一人、のつさくと動き出、抑是は先年上意を蒙り、富士の人穴に入て地獄の底迄名を顯し、此度の狩

ござめりーこそ
あると見える
人穴―忠常居士
の洞穴に入りて
異境に接したる
事あれば云ふ

犬居―尻餅つく

くらには虎より猛き猪を乗留め、日本無双と譽を一天に輝かす。仁田の四郎忠常とは我事。物々し會我殿原。思ふ敵は祐經一人、木葉武者五十百切たる辻、何の益か有。仁田の四郎が手に懸り、御勘氣の者の末孫と、獄門の恥が受たたくば、いざ来いやつ」とぞ罵つたる。詰チ、よい敵ござめり。仁田なればとて、必勝にも極らず。人穴の地獄の鬼猪など相手にしたとは違ふべし。十郎祐成手竝を見よ」と打て懸る。与エ、無分別者は非なし」と、閃く太刀影雨夜の星、電火を飛ばして切結ぶ。更に勝負もなかつし所に、花やかに鎧ふたる武者一人、坂東聲を打揚げ「あら穢らはし我名を盗む曲者、高名を貪るか。伊豆の國の住人仁田の四郎忠常とは我事。見參せん」と呼ばはつたり。祐成飛退り、「六十余州は廣けれ共、頼朝の幕下に仁田ならで武士は無きか、あら仰々し。瘦浪人一人か二人討んとて、彼も仁田も仁田、似たく敷表裏者。二人共に餘さじ物」と打て懸る。「ヤア跡から出て仁田とは人真似か。祐成は討たせじ」と懸隔たれば搔潛り、打付れば懸隔て、祐成一人に仁田は二人、入亂れて揉合しが、陽に開いて打つ太刀を後の仁田が陰に閉ぢ、受流して裙を薙ぐ。祐成が馬手の高股、膝口掛けて切落され、弓手計の片足立、二打ち三打ち打かひも、百手を碎く氣も弱り、犬居にどうと轉びしが、

鬼死すれば云々
一同类に禍のか
かるを恐るゝ謎

爾猴云々一愚人
が賢者を嘲る聲
愚智一愚痴か

指果報一佛聲

「弟の時宗はいづくにぞ。祐成こそ討れたれ、死出の山にて待つべきぞ。いふ事も是迄。サアいづれなり共首を打て。怯れたるか」と聲懸くる。与イヤ討手の實否紛らはしく、黄泉の障も悼しし。誠の仁田が面を見せ名字盗を面縛させん。松明出せ」と呼ばはれば、忠常が下部共挑灯取て差あぐる。仁田と仁田が顔さし合ひ、与ヤア二の宮、以前仁田と名乗つるは御邊よな。扱淺間しや。ヤイ鬼死すれば、狐是を悲むとは、同じ類に禍の、來らんことを悼む故。元縁者の端くれ、御咎の飛しるかよらんことを痛み、祐成を討つて一味せぬ心の云譯とは、はて能い思案。女房を離別せしは、他人に成て兄弟が力とならん心底。尤斯く有べき事と感心せしに、扱は立身の爲の離別か御分別く。よしなき仁田呼が奇怪さ。思はず駈合せ、あつたら若者を手に懸けし残念さよ」と、大きに怒つて恥しむる。二の宮からくと笑ひ、「彌猴が帝釋天を嘲るとやら、おのれが足らざるを以て人の大智を計らんとして、却つて愚智が顯はるよ。二の宮が會我を討んと思はどけふ迄何の待べきぞ。なまなか功有男子と思ひ、名字を借つてほつ散らし、某他人に成たる徳。天下晴れて匿へ置、時節を待て世に出さん」と手を取て引ぬ計にあしらへ共、祐成たじろかねば詮方なし。手柄はしたし怖くは有、二の宮が聲を後楯にかけ合、こほれ幸指果

報、あつたら若者を思はず討て殘念などとは、義を知つた武士の云ふこと。猪に乘て高名とする、獵師風情の云分には、過たく」と云せもあへず、与ヤア小舅をしとめんとする程の不仁もの、武士の情は存も由るまい。祐成が首は御邊急ぎ討て手柄にせい」二「イヤ人に囉ふて手柄にする安清ならず。御邊討て手柄にせい」与「イヤ二の宮討て」三「仁田討て」与「二の宮討て」と、責めかけられ、三「ヲ、小舅の會我を討つ刀二の宮は持合せず。是で討れば御邊討て」と、祐成と切合せし太刀をからりと投出す。忠常おつ取挑灯に透して見れば、こは如何に物打より切先迄、刃を右にて叩き潰し、打みしやいだる髓同然、与ム、最前より此太刀にて討眞似したるか。アツア頼もし共優し共、弓矢取身の手本ぞや。雜言御免二の宮殿」三「それこそ互、惡口御免仁田殿。和殿の如く情有友を持つたる五郎十郎」与「御分の如く誠ある縁者を持つたる會我殿原」二「一生花實も咲かざりし」与「天運の拙さよ」と、二人不覺の落涙に、鎧の袖をぞ絞りける。今を限の祐成起直り、「縁者と申も元は他人の二の宮殿、好なき仁田殿、御芳志は五百生、生替り死替る共、忘るまじし。御手に懸り討るところと、祐成はなんばう果報の者、首討てたべ疾々」と、いへ共二人涙に暮れ、差俯いて居る所に、御所の方より聲々に、「會我の五郎時宗御前近く亂入。御所

運方一落つにか
千鳥一音成の著
物の模様

運開云々一日月
の運行

御戴許一成敗の
意か

の五郎丸が組とめ、御假屋安穩なり」と、呼ばはる聲に祐成、「あれ聞き給へ時宗は召捕られしとや。祐成が最期いかにと案すべし。疾首討て、兄が最期濟かりしと悦せてたへ。仁田殿頼入。南無阿彌陀佛彌陀佛」と、首差伸べて目を閉る。仁名さしの上は承る。御心易かれ」と、太刀抜き持て後に廻り、振上れば祐成が、首は前にぞ遠方に、はや曉の八つの鐘、鳥も啼くく人も泣、ねをなく千鳥の直垂に、首よ涙よ包みても、洩て名高き富士の嶺、曾我兄弟が會稽山、骸は裾野に埋め共、譽は三穂の松の風、他の國迄吹傳へ、昔語を今の世の、人の眠を覺しける。

第五

運關三百六十輪、天運三千六百周、頼朝卿の武運に和し、御狩の御遊建久四年五月廿八日、晝夜十二時に事終、同廿九日の鶏鳴梶原平次景高、朝比奈の三郎義秀、御迎へとして參上す。鎌倉還御の御供揃、廣庇に出給へば、秩父北條和田岡崎、何れもお供の出立にて伺公有。因幡守大江の廣元、奏狀訴狀口書等、數通御前に持參し、「是は御狩中諸人の願ひ訴へ、諸檢使の覺等にて御座候。鎌倉へ歸御有て、御戴許有べく候や。但今朝聞召上らる

曾我亂入一曾我
十悉切の罰况報
告訛判一確實なる
批評となり

べうもや」と伺へば、御寮聞シ召され、「鎌倉へ歸つては留主中の訴も多からん。狩場の間の事共は、只今にて沙汰せんず。廣元讀まれよ」との御説にて、遂一にこそ讀たりける。

「五月廿八日曾我兄弟亂入の刻、御家人手負の檢使竹下孫八左衛門、同安田の三郎見分の覺。一太樂の平馬之丞頼先深疵。但右の方なれば辻疵のこと。一愛甲の三郎弓手の腕馬手の肩後疵二ヶ所。一安西の彌七郎右の横腹深手、臆すたくに切存命不定に相見へ申候。一臼杵の八郎頭を割られ即座に討死。一新開の荒四郎小柴垣を破り辻候砌り、竹のひつ刺にて左の眼突潰し申候。但し自身の怪我の山口上。次を讀まんとする所を、頼朝「暫く々々悉聞に及ばず。鬼神なれば連兄弟二人に見苦き働。假令薄手かすり手負ふせたり共、討留め組留めずんば高名に有べからず。末代の訛判諸家の恥を残すに似たり」御前に於て是を引裂き焼捨る。大智の程ぞ尤成。次の一通押開き、「伊豆の國の住人仁田の四郎忠常恐れながら言上。一、二の宮太郎安清專忠義を存、曾我兄弟が縁者たるを恐れ女房を離別致し、猶以祐成所存を察し、己が名を隠し某が假名を致し、祐成を喰留め申候刻、横合より折合首を取申候。某此度の高名は全く二の宮高名にて御座候。此旨御披露願ひ奉り候以上、月日」頼朝大きに感じ給ひ、「鎌倉の早打時を違へず重々神妙

の仕形。親殺し主殺しの外一家に崇る法はなし。女房も以前の如く相具し、兄弟が老母介抱等少も憚るべからず。老中此旨沙汰せられよ。扱仁田の四郎が高名は今に始ぬ事ながら、譽を他に譲つて身を謙る勇者、感じても余り有。恩賞は鎌倉にて計らふべし。次はく」との給へば「恐れながら言上。拙僧義は、藤澤寺の住持瑞阿上人と申者にて御座候。今晝時分工藤左衛門祐經殿家來、近江小藤太と申仁參られ、梶原平次景高殿仰に候間、日中九ツの鐘を差置八ツに突申べき旨申され候ゆへ、叶ひ難きよし申候へば、拙僧を初寺僧共残らず擲、自身鐘を突、近在隣郷刻限混亂仕候。後日の御咎を恐れ言上仕候以上。月日頼朝大きに御氣色損じ「住持が訴に限らず、隱目附の者共背に耳へ達したり。蒲の入道が切腹も相手は景高と聞。鎌倉に於て急度詮義相遠ぐべし。夫迄は和田の義盛に預置ぞ」との給ひも果ぬに、平次景高「此義は段々申譯」と云ふ所を、朝比奈の三郎義秀、小腕を取て捻すへ、「云分あらば追ての事。今日から親仁が預りじや。北の丸で榎谷が朝食の相伴に、己が頬をはり残して残念」と、四つ五つはりこかし、羽搯締に引縛り、家來が手にぞ渡しける。廣元一通又取上、「會我兄弟が種替の兄、京の小四郎恐れながら言上。右祐成時宗兼々の企承及、數度異見に及候へ共許容なく、御狩場

はつきり〜と
きん〜と

の狼藉至極、上を憚からざる次第恐入存奉り候。是に依て老母并に大磯の虎、化粧坂の少將と申遊女、兄弟一味の者共以上三人擲置申候。私同心仕らざる所聞召分られ、御褒美頂戴仕候はゞ、有難く存奉るべく候以上」君御顔色損じ、「悪くい京の小四郎が訴狀。能く當代を詮義暗しと見立しな。兄弟が力に成程こそなく共、祐經が内通の犬と成て、老母が方へ入込みしと云ふ事、頼朝聞か得有べきか。言語同斷諸人の見せしめ。老母二人の遊女急いで繩を許し、取手の者共彼奴召取來れ」畏て罷立んとする所を、朝比奈三郎又つと出、朝、何の彼奴に取手の者。我等に仰付られかし」頼、チ、兎も角も」朝、忝し」と立出しが立戻り、若し異議に及ばと擲殺して捨申さんか」頼、イヤ〜問ふべき子細有。殺すことは無用〜」朝、はつ」と答へ立出しが又立歸り、「然らば死ぬ程に骨々ほつきほつき捻折て參るべきか」頼、其段は兎も角も」との給へば、朝、アイ忝い。コリヤ面白からふぞ」と、小踊してぞ入にける。頼朝重ねて「日も関なば鎌倉入明日に成。路次の經營もいかよなり。相残る訴は鎌倉にて聞べきぞ。先時宗を引出せ一目對面せん」とぞ仰ける。お次に扣へし御所の五郎丸、時宗が繩引立御白洲に引すへ、御兄弟狼藉の余り此者御寐所近く切入、御命危ふかりし所、某難なく組留めて候」と嚴けに言上す。五

寢所〜寢所

はりに頭ばり
にて鼻端のみ強
きをいふなるべ
し
きれもの一權者
にて當時の巾利

生れた跡云々一
事終りし後に懸
ぎ立する處

郎威丈高に成、「ヤア御尋も無き口上だて。時宗言上する事有。耳を澄まして能く聞け」と、御前の方を振仰き「恐れ多ヤ申條にて候へ共、弓馬の家に生れて、親の敵を討候事、僻事共狼藉共よも御不審は候まじ。只今召出されしは御所の假屋へ討入りし御咎候な。時宗も好む所には候はねど、折合ふ兵頭はりに逆足強く、一人も手に立者候はず。御所の内にはよき武者ぞ宿直仕つらん。功有る武士に出合ひ、討死せばやと奥深く切入候所に、扱々當代のきれ物は化物と功成武士。いぜん我君討て出させ給ふ音。年にも足らぬ大友の一法師が、御物の具に縋つて、「曾我兄弟鬼神なれば逆、御手を下されんは源氏の御恥辱。殿原に仰付られ候へ」と諫言申を遙に聞、しほらしや優や、流石大友の家の惣領。哀此一法師が手に渡り討死せばやと存所、是成五郎丸薄衣被き「取つた」と云ふてしつかと抱付し、頭付は童成。「是社一法師ござめれ。望所」と嬉しく、易々と搦られ、今の千悔万悔。おのれとだに知つたらば、蹴殺して捨ん物。よししく申て詮なきこと。疾疾首を召さるべし」と詞涼しく言上す。五郎丸聞もあへず、「ヤア生れた跡の早め薬、口計の廣言いふなく。既に我手に入たる時、一代一世の力を出し、もぎ放さんと足手をもがき、許せくと大聲上て吠へたれ共、悔り共動かせず、取て引締め繩懸けたを忘れ

たか。よしない口を聞手間で念佛申せ」と冷笑ふ。五郎くつくくと吹出し、「心有て懸つた繩おのれが力で懸けたとは、躰より口の廣ひ奴。とても死んづ命、よしない力身なれ共、時宗が偽りと君の思召、諸大名のさけしみも無念なり。おのれが力に搦められぬ證據、是見よ」と、筋骨に氣を込一搖揺つて、「忍いやうん」とはつたる、高手小手の繩ふつよくと切れたるは、三歳の童が燈心切より易かりける。飛懸つて五郎丸を、膝の下に取て引伏せ、時「ヤア夜前おのれが力にて搦めたが定ならば、ま一度御前で搦めよ」と、胴骨を膝節にて、ひしけて退と押ければ、聲は出す兩眼に溢す涙は雨やさめ、油をしめる如くなり。斯る所へ朝比奈の三郎、小猫を提たる如くにて、京の小四郎が細首撮んで馳來り、御前にどうど打付る。頼朝御覽じ、「己は親兄弟に逆ひ、敵に組せし無道者。此世に祐經が居ぬからは未來へ參つて奉公せい。それく暇」との給へば、時宗謹んで頭をさけ、「明かなる御政道、先達し祐成さぞ有難く存べし。去ながら胤こそ替れ兄は兄。命召されんをまざまざと、見て居んも不仁の至り。助命願ひ奉る」と思ひ込で言上す。頼時宗に免じ命は許すぞ。剃りこほつて追拂へ」「承る」と朝比奈「剃刀も刃物の内。おのれに當てるは穢らはし。義秀が手剃刀戴け」と、髮くるくと手から巻き、一引くつと、少あ痛

剃りこぼつて僧
になして也

二引が云々―二引が萬僧供養といふを反對にいふ、實流小栗判官の句を取る。たい坊主頭を罵つていふ詞。長助―寺男の通り名。

聖もれば―聖よれば

たた」鵜ヲ、痛い筈。一引が千僧供養、二引が萬人の物笑ひ。鳥の毛を引く芥子の花もぐ、ずんほろ坊主、ねつたい坊主鉢坊主。是がお寺の長助」と、笑ふてこそは追立ける。時宗五郎丸を引起し三間計取て投、「申ことも是限り。今生に用なき男サア寄て繩掛けられよ」と、後手に成て待ければ、雜式共はや繩持て立かゝる。鵜ア、暫しく」と御聲を懸け給ひ、「日本無双の兄弟助け置たき者なれ共、兄祐成が討れし上は、助かれといふ共よも助からじ。頼朝が父義朝を討たる長田の庄司めが首、討たる時の嬉しさは、平家の一門が首百千にもかへざりし。彼等が今日の心の悦び命の何か惜からん。國の憲法是非もなし。鷹が岡へ引出し、今生の暇取らせよ。去ながら一騎當千の兵、雜兵に繩掛けさせんは、弓矢の冥加も恐れ有。頼朝が繩掛けん」と、忝くも御大將白洲に飛おり、眞紅の房打たる御鎧の總巻取て押たぐり、鵜頼朝が右の手には西三十三ヶ國、左の手には東三十三ヶ國、六十余州の力を以テ懸けたる繩ぞ。恨むるな」とお聲の内よりも、時宗「わつ」と聲を上、「なふ伺公の大名小名、秋津島を海に譬おれば、零程もなき、數ならぬ時宗が、親の敵討ずんば、日本の大將軍、頼朝公の御手より繩を受、斯る情の御詞を聞べきか。父河津聖靈先立し祐成も、いか計悦び奉らん。哀今一度生れ替り、御馬の先に

結縁—佛に縁を
結べと也

て討死し、此御恩報じたや。三寶佛陀も憐みたまへ」と、聲を上げて泣ければ、滿座の諸武士感涙し、鬼を欺く朝比奈も、「浦山しや時宗、果報ものよ時宗。有難の我君や」と、すより上く、涙の中の悦びは、道理とこそ聞えけれ。和田秩父、千葉上總、「心あらん者共は繩に手をかけ結縁せよ。御立ちぞふ」と呼ばはれば、御門に控へし虎少將、母を誘ひ走り入、君を禮し時宗が繩に縋つて悦び泣。門にお馬のいばふ聲、假屋の木戸も明七つ、谷七郷の鎌倉へ、目出度還御なされける。今日一日の十二時、今日一日の十二時、今日一日の十二時、つもり積つて百千年、盡せぬ源氏の繁昌こそ、民安全の國土なれ。